

さぬき市埋蔵文化財調査報告 第5集

森 広 遺 跡

ガソリンスタンド建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007. 9

さぬき市教育委員会

森 広 遺 跡

ガソリンスタンド建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2007. 9

さぬき市教育委員会



1 SH01出土弥生土器



2 SE01出土遺物

序

森広遺跡群は弥生時代後期を中心とする遺跡群です。円形銅器、銅鐸片、平形銅劍など多彩な青銅器が発見されており、学術的に注目される遺跡であります。

今回の調査では堅穴住居跡1棟、不明遺構3基と弥生時代の遺構はあまり多くありませんでしたが、堅穴住居跡からはたくさんの弥生土器が出土し、貴重な資料となりました。また、江戸時代の遺構としては、溜堀、導水溝、井戸などの貯水施設が発見されました。当時の人々が水不足と戦いながらどのような工夫をして貯水していたか、その断片を知ることができました。このような資料が蓄積することで讃岐人の水との歴史的な関わりが少しづつ明らかになってくることを期待したいと思います。本報告書が歴史研究の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と关心が一層深められれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたりましてご理解とご協力いただきました地元の皆様ならびに関係各位、また、ご指導とご援助をいただきました方々に厚くお礼を申しあげます。

平成19年9月

さぬき市教育委員会

教育長 豊田 賢明

例　　言

1. 本書は、さぬき市埋蔵文化財調査報告第5集で、ガソリンスタンド建設に伴う森広遺跡の発掘調査報告を収録した。
2. 今回の発掘調査はさぬき市寒川町石田1369-1・2に所在する森広遺跡である。
3. 事業費はメガペトロ株式会社が全額を負担した。
4. 調査の実施はさぬき市教育委員会が調査主体となり事務を、現場実務は大川広域行政組合埋蔵文化財係が実施した。
5. 本書の編集作成は大川広域行政組合埋蔵文化財係松田朝山が行なった。また、遺物整理を武井美和、六車ふみ子、米田武子、遺物実測・トレースを松田朝山、多田歩が行った。
6. 近世陶磁器については、香川県歴史博物館　松本和彦氏のご教示を得た。記して謝意を表します。
7. 森広遺跡周辺の溜堀に関しては藤井洋一氏のご教示を得た。記して謝意を表します。
8. 報告で用いる北は国十座標第IV系の北である。縮尺は掲載図面内に掲載している。
9. 遺物観察表及び上層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準上色帖1998年度版』を使用している。
10. 報告書で使用した航空写真は『財団法人　日本地図センター』から購入したものである。
11. 掲図の一部に国土地理院地形図「志度」(1/25,000)を使用した。
12. 本事業及び本書の作成にあたっては、地権者をはじめ次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。(敬称略・五十音順)

香川県教育委員会文化行政課、さぬき市シルバー人材センター、株式会社タツノ・メカトロニクス、池田泰了、遠藤マサ子、片桐孝浩、北原清美、木村豊晴、神野耕夫、真田サダコ、谷シゲコ、松本和彦、宮崎正美、六車恵一、六車ふみ子、米田武子

本文目次

序文　　例言	
第1章　調査に至る経緯と経過	1
第1節　調査に至る経緯	1
第2節　調査の経過	1
第2章　立地と周辺の歴史的経過	1
第3章　調査の成果	5
第1節　土層	5
(1) ベース土から上位の堆積	5
(2) ベース土の様子	5
(3) ベース土から下層	5
第2節　遺構・遺物について	
(1) SH 0 1	5
(2) SH 0 2	15
(3) SX 0 1、SX 0 2、SX 0 3	15
(4) SE 0 1	15
(5) SX 0 1、SD 0 1	23
(6) SX 0 5	25
(7) SK 0 1	26
(8) SK 0 2	28
(9) SK 0 3	28
(10) SK 0 4	28
(11) SK 0 5	28
(12) SK 0 6	28
(13) SP 0 1・0 2・0 3	28
(14) SP 0 4	28
(15) SP 0 5	28
(16) SP 0 6	28
(17) SP 0 7	28
(18) SP 0 8	28
(19) SP 0 9	28
(20) 耕作痕	28
第3章　まとめ	28
第1節　弥生時代～古墳時代の遺構について	28
第2節　近世の遺構について	29
(1) 遺構の時期変遷について	29
(2) 富田焼の製品について	29
(3) SX 0 4 と SD 0 1 について	29

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1/2500)	2
第2図 周辺遺跡位置図 (1/20000)	4
第3図 遺構配置図 (1/80)	6
第4図 調査区断面土刷図 (1/80)	7
第5図 SH 0 1平面・断面図 (1/40)	8
第6図 SH 0 1遺物出土状況図 (1/30 遺物 1/6)	9
第7図 SH 0 1出土遺物 (1) (1/4)	10
第8図 SH 0 1出土遺物 (2) (1/4)	11
第9図 SH 0 1出土遺物 (3) (1/4) (1/2)	13
第10図 SH 0 2平面・断面図 (1/40)	14
第11図 SX 0 1・0 2・0 3平面・断面図 (1/40) 及び SX 0 1出土遺物 (1/4)	14
第12図 SE 0 1平面・立面・断面図 (1/40)	16
第13図 SE 0 1出土遺物 (1)(1/3)	18
第14図 SE 0 1出土遺物 (2)(1/3)	20
第15図 SE 0 1出土遺物 (3)(1/3)	21
第16図 SE 0 1出土遺物 (4)(1/3 135は1/5)	22
第17図 SE 0 1裏込め石内出土遺物 (4)(1/3)	23
第18図 SX 0 4平面・断面図及び SD 0 1平面図 (1/50)	24
第19図 SX 0 4・SD 0 1断面図 (1/50)	25
第20図 SX 0 5平面・断面図及び出土遺物 (1/3)	26
第21図 土坑 (SK) 及び SK 0 2出土遺物 (遺構 1/40、遺物 1/3)	27
第22図 ピット平面・断面図 (1/40) 及び ピット出土遺物 (1/3)	27

表目次

表1 遺物観察表 土器 (1)	31
表2 遺物観察表 土器 (2)	32
表3 遺物観察表 土器 (3)	33
表4 遺物観察表 陶磁器・陶器	34
表5 遺物観察表 瓦	35
表6 遺物観察表 石製品	35
表7 遺物観察表 鉄製品	35

図版目次

- 図版 1-1 調査区周辺航空写真（昭和39年）
図版 2-1 調査区全景（西から）
図版 2-2 調査区全景（東から）
図版 3-1 SH 01 (東から)
図版 3-2 SI 01 遺物出土状況 (北から)
図版 4-1 SH 02 (南東から)
図版 4-2 SE 01 (南から)
図版 5-1 SE 01 石積状況 (東から)
図版 5-2 SE 01 底場の様子 (東から)
図版 6-1 SE 01 断ち割り (東から)
図版 6-2 SX 04、SD 01 (西から)
図版 7-1 SH 01 出土遺物
図版 8-1 SE 01 山上遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

森広遺跡はさぬき市寒川町石田東に所在し、弥生時代～中世の集落遺跡として知られている。平成18年11月、メガペトロ株式会社よりガソリンスタンド給油所拡張（地下タンク埋設工事）に伴う埋蔵文化財発掘の取扱いについて照会がなされた。さぬき市教育委員会では照会地は遺跡であるため文化財保護法に基づく保護措置が必要であることを回答し、平成18年12月5日、メガペトロ株式会社より埋蔵文化財包蔵地発掘の届出が提出された。平成19年1月10日、香川県教育委員会はメガペトロに対して「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の（通知）を行い、工事着手前に工事対象範囲についての発掘調査を実施する旨を通知した。平成19年1月下旬から2月上旬にかけて、発掘調査方法、調査費について事前協議を事業主と数回行い、平成19年2月19日「埋蔵文化財調査協定書」を締結した。調査はさぬき市教育委員会が主体となり、大川広域行政組合埋蔵文化財係が担当した。

調査体制は以下のとおりである。

（調査体制）

さぬき市教育委員会生涯学習課

課長 六車 均

課長補佐 佐伯 宗澄

係長 山本 一伸

主事 鶴身 昌大

大川広域行政組合理藏文化財係

主任 阿河 銳二

主事 松田 朝由

技術員 多田 歩

技術員 武井 美和

第2節 調査の経過

発掘調査は平成19年2月19日に開始した。19・20日で機械掘削を行い、21日から遺構検出をした。28日にSH01の弥生土器を検出し、遺構内には多量の土器が見られ、完形に近い個体も認められた。3月1日、SH01に隣接する土坑において地表面から1.4m下位で円形に巡る石組を確認し、戸門跡であることが判明した。8・9日で戸門の完掘、断面観察のため重機による石組の断ち割りを行った。発掘調査は3月9日に終了した。調査期間は平成19年2月19日～3月9日までの実動14日間であった。

整理作業は平成19年3月27日から開始した。まず遺物洗いと図面整理を行い、4月1日から遺物の注記、

接合を行った。5月1・2日で掲載遺物のピックアップを行い、5月の1ヶ月間は遺物の尖削を行った。6月は図面のレイアウト、トレース、土器復元、文章執筆を行ない、6月末で整理作業を終了した。

第2章 立地と周辺の歴史的経過

森広遺跡の位置するさぬき市寒川町石田は南部に阿讃山脈から派生する丘陵が北の平野部に向っていくつも伸びている。遺跡は梅柳川東岸の微高地に位置する。

周辺地域において旧石器時代は旧大川町の平尾地区と宮町地区に尖頭器が採集されているのみで旧寒川町ではこれまでのところ発見されていない。縄文時代は遺構として石仏西遺跡で溝が検出されている。土器・石器は後期において加藤遺跡や右田高校校庭内遺跡で、晚期において土器が森広遺跡、石田高校校庭内遺跡で出土している。

弥生時代前期は石田高校校庭内遺跡で縄文時代晚期の土器とともに甕が、神前遺跡で前期後半の甕が出土している。

弥生時代中期は養神遺跡で環濠らしき3条の溝とともに中期末の甕が出土し、極楽寺墳墓群で消失家屋から土器片、石器、鉄製品が出土している。寺田・岸宮通遺跡では堅穴住居跡を検出し、甕、石器が出土している。布勢遺跡では包含層から中期末の土器が多量に出土している。天王山遺跡は堅穴住居跡が見られ、多数の石礫、打製石包丁が採集されている。この他、布勢神社周辺から東の御田神池周辺にかけて石器の採集できる石田神社遺跡では磨製石包丁が採集され、極楽寺地区集落東側の極楽寺遺跡では土器片、石礫、扁平片刃石斧、彫形石器が採集されている。中期の遺跡は丘陵上に多く、丘陵上に集落を営み、その下の谷平野で稻作を行なっていたと推測される。

弥生時代後期は平野部の南端に当る砂礫台地上に遺跡が多く営まれるようになる。1911年に8点以上の巴形銅器の出土した森広天神遺跡、平形銅劍3点が出土したといわれる石田神社遺跡、堅穴住居跡とともに扁平錐形製錬炉・鋸鉄片7点の出土した加藤遺跡、数次にわたる調査で弥生時代後期・古墳時代末・平安～室町時代の集落跡が確認された石田高校校庭内遺跡、溝とともに多量の土器の出土した布施遺跡、弥生時代後期前半～終末期の集落及び円形周溝、土器棺墓等の墓地を検出した森広遺跡があり、これら東西約400m、南北約800mの遺跡群を森広遺跡群として捉え、多彩な青銅器を保有する弥生時代後期・終末期の人型化した集落と評価されている。森広遺跡の周辺には後期の堅穴住居跡、集石造構、土坑を検出した道味遺跡、4棟の堅穴住居跡とともに多くの後期後半の土器が出土した寺田大角遺跡、堅穴住居跡、掘立柱建物跡と小型



第1図 遺跡位置図 (1/2500)

仿製鏡を出土した寺田產宮遺跡、丘陵上では台状墓、上抗墓、豎穴住居跡を検出した大井西遺跡がある。墳墓は森広遺跡、大井西遺跡の他に大井遺跡、古枝遺跡群、奥10・11号墳、時友墳墓群など枚挙に暇がない。

古墳時代前期は石田地区では集落、墓地ともに希薄であるが、列石をもった墳墓、箱式石棺、木棺墓、土壙墓等を検出した極楽寺墳墓群が確認されている。布勢遺跡では前期から中期にかけての上師器類が多量に出土し、性格不明の小穴群を確認している。周辺に集落遺跡が推察される。布勢遺跡では他に勾玉3個が伝わる。碧玉製の1例は頭部に三条の絹線を施した丁字頭となっている。古墳は北側の丘陵に集中する。西から舶載鏡の出土した前方後円墳の奥3・13・14号墳を中心とした奥古墳群や古枝古墳。石蓋土壙墓を半体部にもつ円墳の黒岩古墳、豎穴式石室を有する森清古墳などがある。

古墳時代中期は石田神社境内古墳群において須恵器大甕が出土している。5基の古墳があり、古式群集墳として評価されている。古式群集墳としては他に旧大川町と寒川町の境に大井七つ塚古墳群がある。赤山古墳は墳丘に円筒埴輪が見られ、中期から後期にかけての特徴が指摘されている。この他、山田古墳、道味古墳に中期古墳の可能性が指摘されているが、遺物等が現存せず詳細は不明である。旧大川町内では四国最大の前方後円墳である富田茶臼山古墳があり、西側には陪塚が確認されている。落合古墳は2基の古墳がかってはあって中期末の須恵器が散布していた。

後期は6世紀中頃の天王山古墳が築かれて後、6世紀後半から横穴式石室を有する多くの古墳が確認できる。石田では山田地区の横穴式石室、大木古墳群、野崎古墳、養神古墳群、極楽寺古墳群、相ノ山古墳群、中尾古墳等があり、阿讃山脈から伸びる尾根上、山腹傾斜面に立地している。一方、石田地区平野部の独立丘陵には天王山2号墳、金山古墳がある。旧大川町では平野古墳群、柴谷古墳群、一の瀬古墳群、八剣古墳がある。

後期古墳は7世紀以降も追葬されるが、7世紀後半以降はほとんど認められなくなる。

7世紀の集落遺跡は森広遺跡や千町遺跡の豎穴住居跡群がある。森広遺跡掘立柱建物跡では7世紀中頃の掘立柱建物跡が8世紀代の条里の方向にあった建物と異なる方向を指向する。森広遺跡の北約200mは南海道の存在が指摘されている。

律令制下の石田地区には寒川郡石田里が定められ、四天王寺伽藍配置が想定される極楽寺廃寺がある。白鳳期から平安時代までの短弁連華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、偏行唐草文軒平瓦、鶴尾が出土した他、経筒（明治18年発見、平安時代）、鉄錫杖、奈良興福寺金堂鎮壇具であった唐草双鸞八花鏡の踏み返し鏡（明治18

年発見）が出土している。昭和6年刊行の『石田村誌』には極楽寺廃寺の南西2町（約200m）に窯跡のあったことが指摘されており、極楽寺廃寺の瓦を焼いていた窯跡との云い伝えを記載している。

地蔵川を南に通った山間部の小倉には小倉廃寺があり、山崩の峰の薬師と呼ばれる尾根上や谷部には礎石や布目瓦が確認されている。

古代寺院は他に神前地区の石井廃寺、旧大川町の下り松廃寺、川東廃寺がある。

極楽寺廃寺の南西700mの丘陵傾斜面に大衰彦神社がある。この神社は延喜5年（905）から延長5年（927）にわたって編集された『延喜式』のうちの「神名帳」に記されたいわゆる延喜式内社である。現在の大衰彦神社から北側の丘陵裾部から12世紀の白磁四耳壺が出土（昭和32年頃発見）しており、神社との関わりが推測される。また、中世（1215～1254年）には讃岐国寒川郡司讃岐基光が大般若經600巻を寄進している。

集落は石田高校校庭内遺跡、森広遺跡、木村・横内遺跡で条里にあう掘立柱建物跡や溝跡を検出している。また、森広遺跡の8世紀前半の溝からは、十師器、須恵器に混じって回転台土師器や東北系黑色上器、北関東系の盤が出土している。

古代蔵骨器、経塚には時友蔵骨器や谷経塚がある。

文献では康治2年（1143）の太政官牒案に「石田郷」の記載が見られる。

中世は嘉元4年（1306）の御領目録によって昭慶門院領になっていたことがわかる。

石田高校校庭内遺跡や木村横内遺跡において鎌倉時代から室町時代にかけての集落跡が検出され、布勢遺跡からは同時期の遺物を多く含む溝を検出している。

中世城跡は石田地区では石田城跡、国弘城跡が、旧大川町では雨滝城跡、六車城跡が知られている。

近世は富田燒という焼物生産が行われており、旧大川町に吉金窯跡、半尾窯跡がある。



1. 霧広遺跡
2. 本村・横内遺跡
3. 有物遺跡
4. 通味遺跡
5. 石田城跡
6. 石田神社境内古墳
7. 石田神社遺跡
8. 道造1号墳
9. 道味2号墳
10. 野筋古墳
11. 神崎遺跡
12. 古井遺跡
13. 青木古墳群
14. 金山古墳群
15. 石田高校校庭内遺跡
16. 加藤遺跡
17. 森広天神遺跡
18. 貢神塚古墳
19. 白磁出土地
20. 萩原古墳群
21. 大森彦神社
22. 鶴井古墳群
23. 大井城址
24. 大井西遺跡
25. 落合古墳群
26. 大井遺跡
27. 寺田遺跡
28. 寺田座山遺跡
29. 慈業寺秘跡
30. 相ノ山古墳群
31. 中尾古墳
32. 萩神東古墳群
33. 桜塚古墳群
34. 桜塚古墳群
35. 石井廟
36. 大井七つ塚古墳群
37. 古枝西遺跡
38. 奥古墳群
39. 古枝遺跡群
40. 吉枝古墳
41. 平尾遺跡
42. 黒岩古墳
43. 南泡遺跡
44. 森清古墳
45. 宮町鶴谷古墳群
46. 時友鐵器器山土地
47. 時友生塚墓群
48. 葦谷古墳群
49. 富田茶臼山古墳
50. 笠ぶに山古墳
51. 谷經塚
52. 六車城跡
53. 了智坊遺跡
54. 下り松魔寺
55. 千町遺跡
56. 石仏西遺跡
57. 富田茶臼山古墳1号陪塚
58. 富田茶臼山古墳2号陪塚
59. 富田茶臼山古墳3号陪塚
60. 一の瀬古墳
61. 二の瀬古墳

第2図　周辺遺跡位置図 (1/20,000)

第3章 調査の成果

第1節 土層

(1) ベース土から上位の堆積

調査対象地の現状は造成による盛土で標高36.6～36.8mの平坦地をなす。遺構上面までの堆積は表層から花崗土、旧耕土、床上で、局的に床下と、遺構面上に1層見られる。

花崗土は地表面からは約1mの厚さで堆積が見られる。この層から遺物の出土は認められない。花崗土を除去すると、一面に旧耕土が見られる。旧耕土は6～10cmの堆積で、下位にはMnを多く含む床上が見られる。床上は灰黄褐色土とぶい黄褐色土からなり、10～15cmの堆積である。

調査区北東部では遺構面と床上間にぶい黄褐色土の堆積が見られる。この層では比較的多くの近世遺物を包含している。

(2) ベース上の様子

床土の下位は黄褐色シルトで調査区全体に安定して見られる。検出された遺構はこの層の上面で近代～現代の耕作跡、近世～近代の井戸跡、弥生時代後期の堅穴住居跡が同一面で見られる。確認された遺構面は調査区全体においてほぼ平坦で標高35.5～35.6mであるが、調査区南半は弥生時代後期の遺構の削平が推察されるため弥生時代当時の遺構面は南にかけて傾斜していたと推測される。今回の調査区から1本道を隔てた南側の『平成7年度森広遺跡調査』のIII区では遺構面の標高が36.0mで今回とは約50cmの比高差で高く、今回の調査区から北の『平成13年度森広遺跡調査』における遺構面の標高は35.0で今回とは約50cmの比高差で低い。よって現状で検出される遺構面は南から北にかけて傾斜して下っている。

(3) ベース上から下層

遺構面から下層は調査区壁際に設定した側溝や溝状遺構の壁面観察によって伺うことができる。調査区東半はシルト層と砂礫層の互層が顕著である一方、調査区西半は比較的安定した堆積が見られる。

ベース土下には砂礫層が約20cm堆積し、その下位に明黄褐色土が約10cm堆積する（上面の標高約35.0m）。その下位は再び砂礫層が40cmで厚く堆積し、更に下位は黄褐色土が80cmと厚く堆積する（上面の標高約34.5m）。更に下には再び砂礫層が見られる。これらの層は掘削による確認を行っていないが、壁面観察等では遺物の包含は認められない。

第2節 遺構・遺物について

前述したように今回の調査区では弥生時代、近世、

近・現代の遺物が同一遺構面で確認された。記述は古い時代から順に行う。

まず、弥生時代の遺構としてSH01、SX01～03、古墳時代後期の遺構としてSH02がある。

弥生時代～古墳時代後期の遺構

(1) SH01

① 検出状況

調査区北西隅において検出した。遺構は調査区内に一部かかる状態のため全景が明らかでなく、また、明瞭に堅穴住居跡の特徴を示す床下構造も見出せなかつたため堅穴式住居跡と断定するにはためらいもあるが、取りあえず堅穴住居跡と推測して報告する。

検出状況は落ち込みラインが円形に巡るが整った円ではなく、直径を復元するのは困難である。円形に巡るすれば10mを越える大型となる。

② 形態・構造

壁面の立ち上がりは緩やかな傾斜である。床面はほぼ平坦であるが、壁際から1.3～1.8m間は内側よりも20cm程度高いテラス状になっている。床面から検出面までの高さは約50cmである。

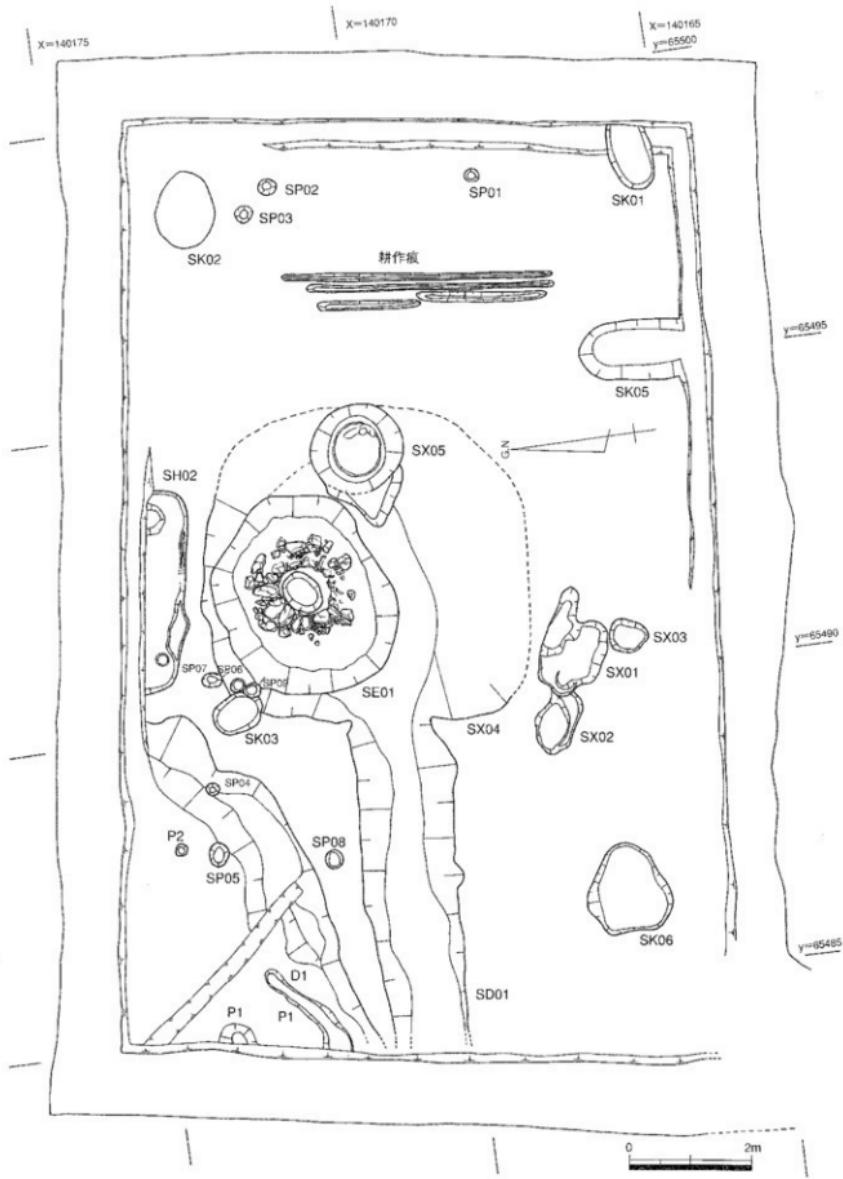
床面は調査区内では痕跡などの施設は認められない。また、床面に貼床等の施設は認められず地山の砂質土である。調査区西壁からは東にかけて幅25～50cm、高さ約5cmの浅い溝が伸びている。この溝は約1.6m伸びて途中で収束している。埋土は褐色土である。その他、床面には2基のピットが見られる。P1は調査区西壁で検出した。おおよそ半分が調査区外である。径約60cm、深さ約20cmである。埋土は褐色土である。P2は径約20cm、深さ約10cmである。なお、遺構内には他にSP04、SP05があるが、これらは堅穴住居跡の埋土上から検出され、後出する遺構である。

③ 埋土

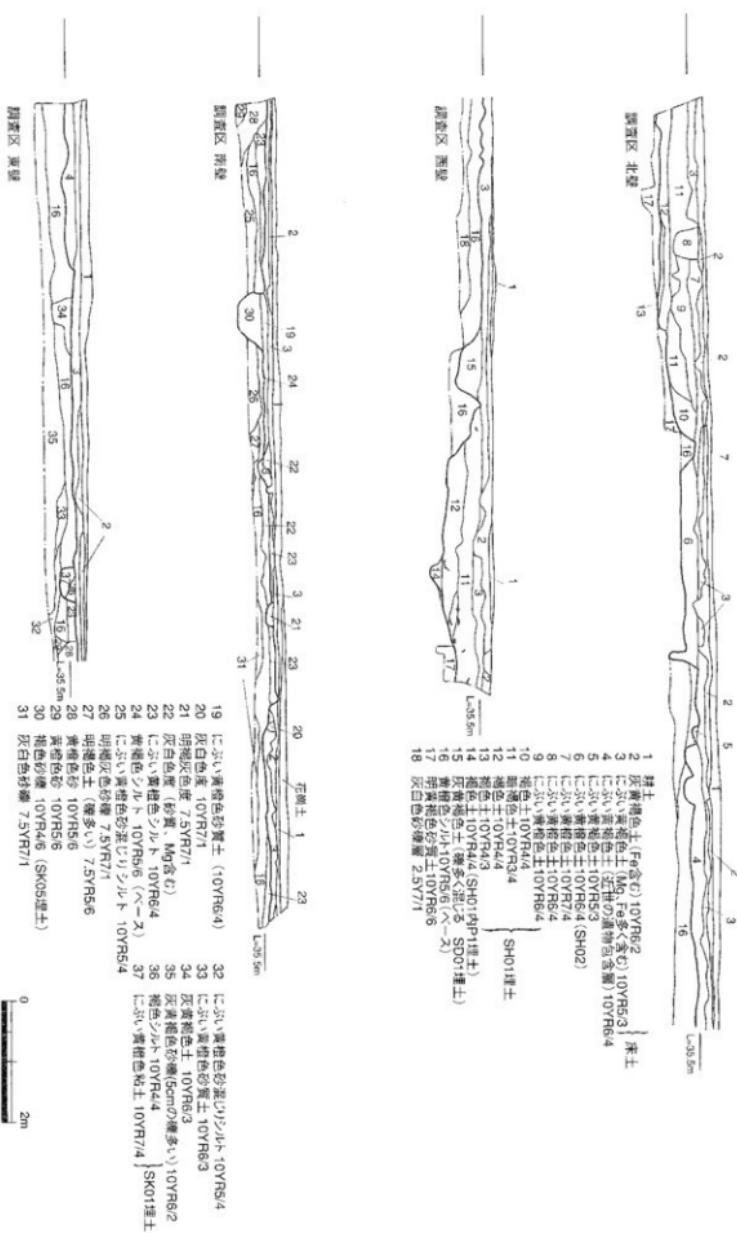
検出面から20～40cmの厚さでやや粘質のある暗褐色土が厚く堆積している。遺物の大多数はこの層から出土している。暗褐色土の下層は砂質の褐色土が堆積している。この層からも遺物は検出されたが上層に比べて少量である。この層の下位が床面となる。

④ 遺物出土状況

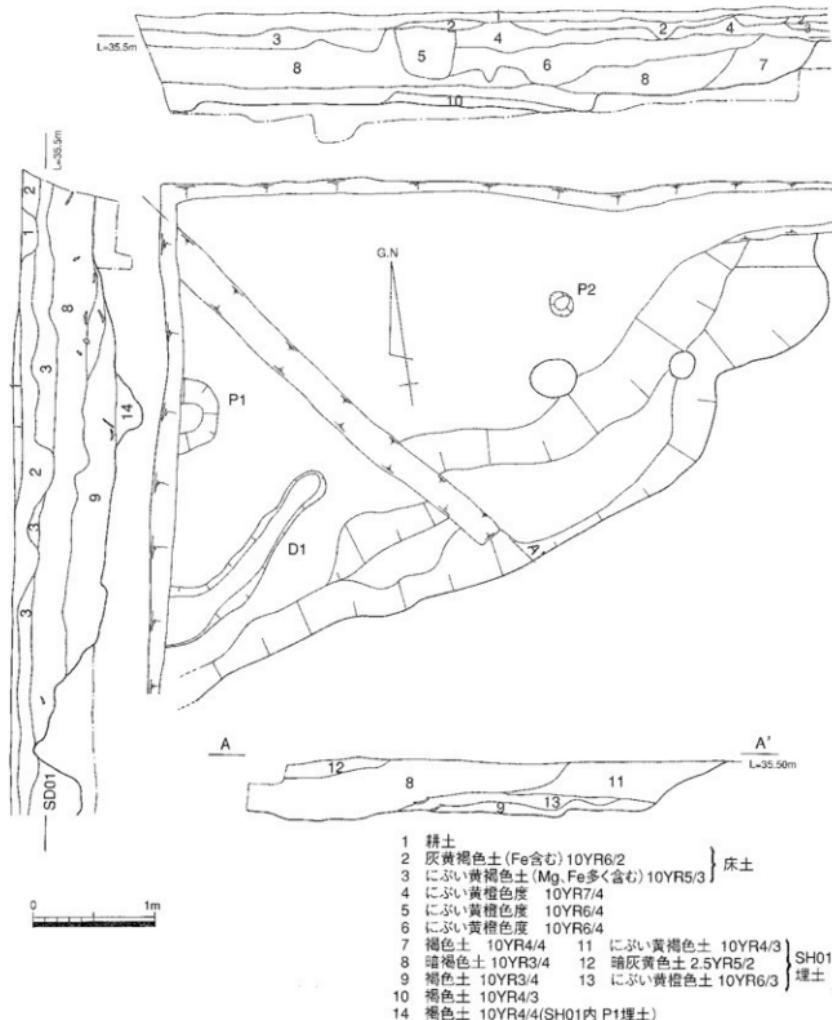
弥生土器、鉄製品、叩石、サヌカイト片が出土している。遺物の大多数は暗褐色土内に見られ床面直上の事例は少ない。また、調査区内の堅穴住居跡を二分する位置に上層確認のためのベルトを設定したが、ベルトから西側は遺物量が少なく主として東側に集中して認められる。遺物は完形に近いものや破砕した土器片が1箇所にまとまっており完形に近い状態で埋没したと考えられる事例が5例程認められたが、多くは広範囲に散乱している。よって大多数は調査区外の遺構の



第3図 遺構配置図 (1/80)



第4図 調査区壁面土層図 (1/80)



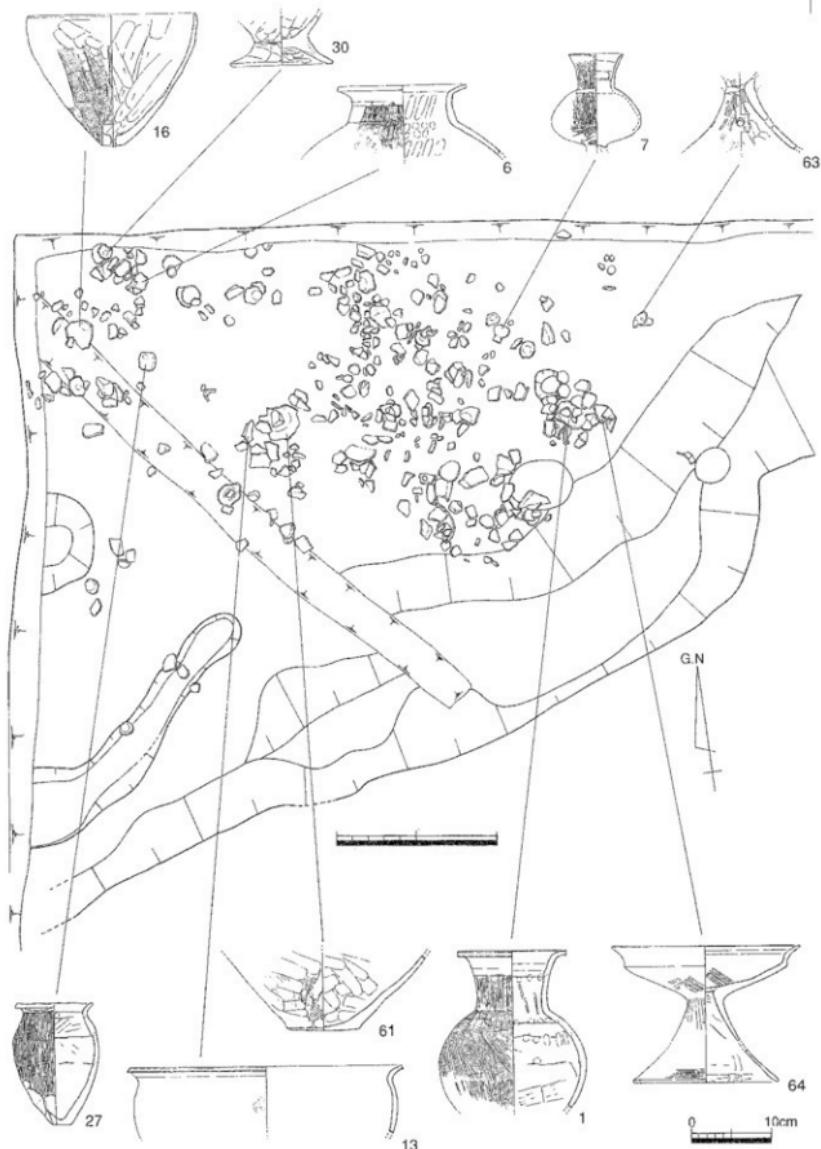
第5図 SH01平面断面図 (1/40)

延長に埋没している土器片と接合するものと推測される。出土した弥生土器はコンテナ約10箱分である。なお、出土した遺物は形態的特徴から大きな時期差が認められず、良好な一括遺物といえる。

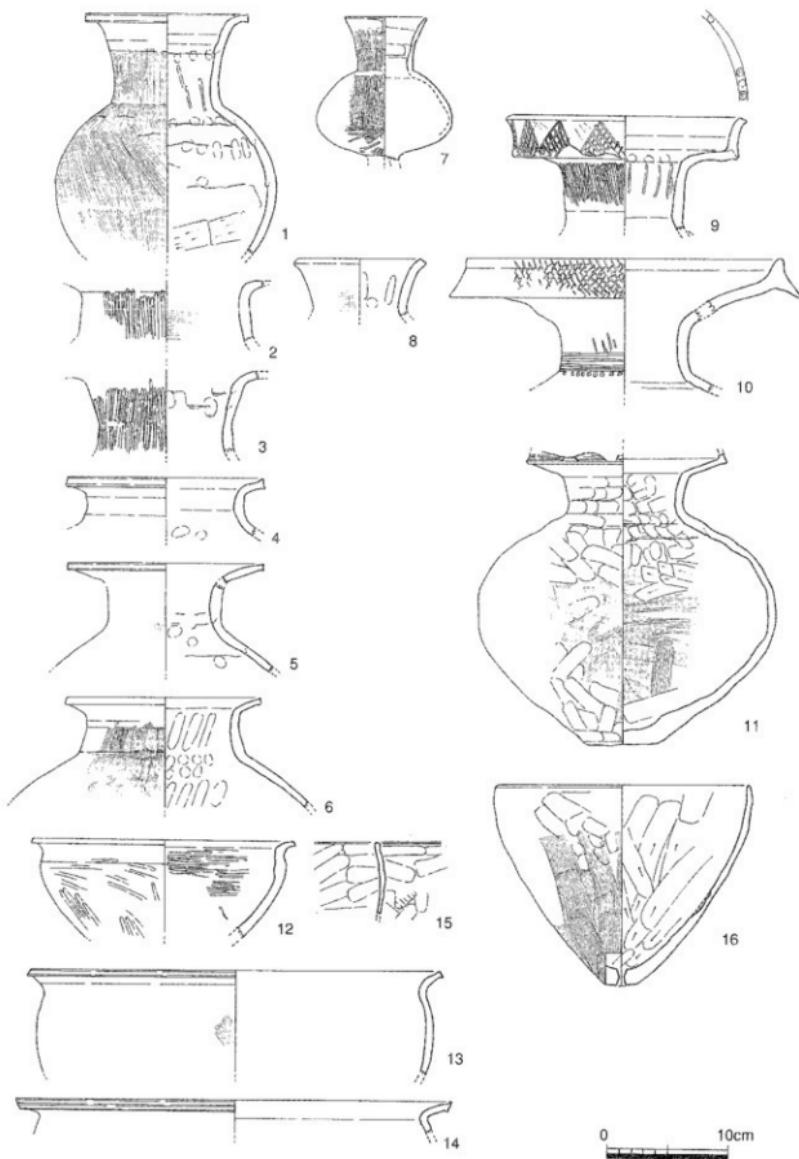
⑤ 出土遺物

(壺)

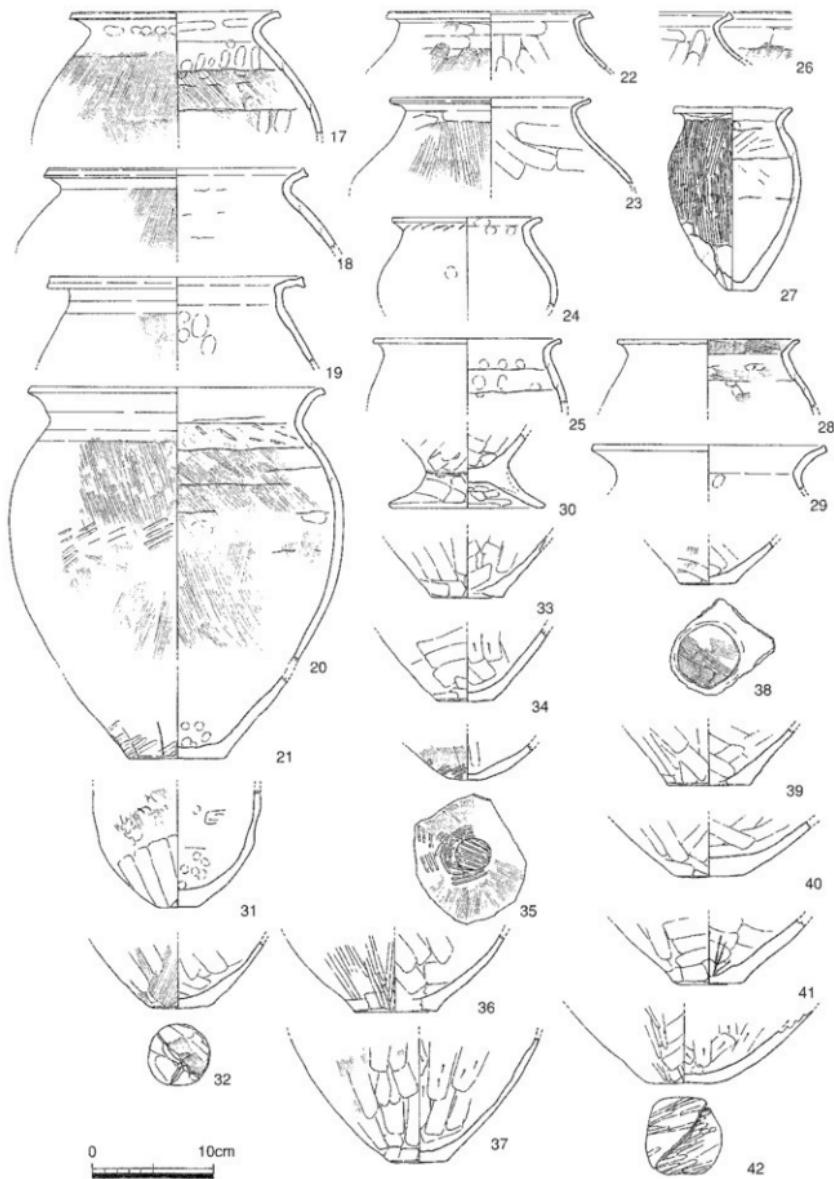
1は長颈の壺。外面全面にハケが見られ、頸部上位はナデによってハケが消されている。口縁端部及び口縁部内面には強いナデが見られる。球形の胴部内面は



第6図 SH01遺物出土状況図 (1/30 遺物は1/6)



第7図 SH01出土遺物 (1) (1/4)



第8図 SH01出土遺物 (2) (1/4)

上半に接合痕が顕著で下位にケズリが見られる。2・3は長頸の壺である。外面に縦位のヘラミガキが見られる。2の内面は横ハケの後のナデによってわずかにハケが残る。3は内面に接合痕と指揮さえが見られる。頸部から口縁部にかけて器壁が薄くなっていく。4はやや外反する短い頸部をもった壺。口縁端部及び上端部はつよいナデが見られる。5は浅黄橙色をした軟質の壺。断面は黒色をなす。6は内傾した頸部から屈曲して外方に直線気味に広がる形態を有する。外面にはハケが顕著で頸部上位は横ナデによってハケが消されている。口縁端部はよわいナデが見られる。内面は指ナデ、指揮さえが顕著で接合跡は完全に消されている。7は脚付きの小型壺である。頸部は外反しながら伸びるがあり長くはない。胴部は最大幅が下半の下膨れを呈する。外面には丁寧なミガキが見られる。8は頸部から外方に聞き、口縁部が若干肥厚する。端部はナデによって面をなす。9・10・11は口縁帶を有する壺である。9は直線的に立ち上がる頸部から屈曲して外方に広がり、口縁部は外反気味に口縁帶を直立させている。口縁帶には鉛筆文を施す。口縁端部はナデによって面をつくり、列点文を施す。調整は頸部外間に密な綫方向のヘラミガキ、内面には綫位に比較的等間隔の工具痕が見られる。10は口縁部を上下に肥厚させて口縁帶を作成している。特に下方への拡張が著しい。文様は幅1cmの斜め方向の平行沈線を上下に交差させながら格子状に表現する。胴頸部屈曲点には列点文、その直上の頸部下端には4条の平行沈線を施す。器面は脆弱で保存状態はよくない。土器片は比較的広域に散乱して出土した。11は内向する口縁帶に沈線状の鉛筆文が見られるが破損のため全体像は不明である。胴部は最大幅となる中位がつよく張る。頸部は外方に開く形態で、途中に屈曲点をもつ。器面は堅緻で内外面にナデ、ハケ調整が目立つ。ケズリは内部下端付近の胴部上半において部分的に施している。

(鉢)

12は胴部から細く短い口縁部をなす。口縁部外面は強いナデによって外反している。内外面にヘラミガキが見られる。13はにぶい黄橙色を呈する脆弱な胎土である。比較的まとまって各土器片が出土している。器壁が薄く、口縁端部はナデによって面をなす。14は口縁部を上下方向に肥厚させ、端部には2条の沈線が見られる。器種としては盤になる可能性もあるが一応鉢として取り扱った。内面の胴頸部境の屈曲は鋭い稜線をなす。器面は堅緻な橙色を呈する。

(瓶)

15は直線的に立ち上がり、上端に面をもつ口縁部を有することから瓶の可能性が高い。内外面ともにナデ調整が見られ、口縁部外面にはやや強い横ナデが見られる。16は径2.8cmの小底部から胴部は外方に立ち上

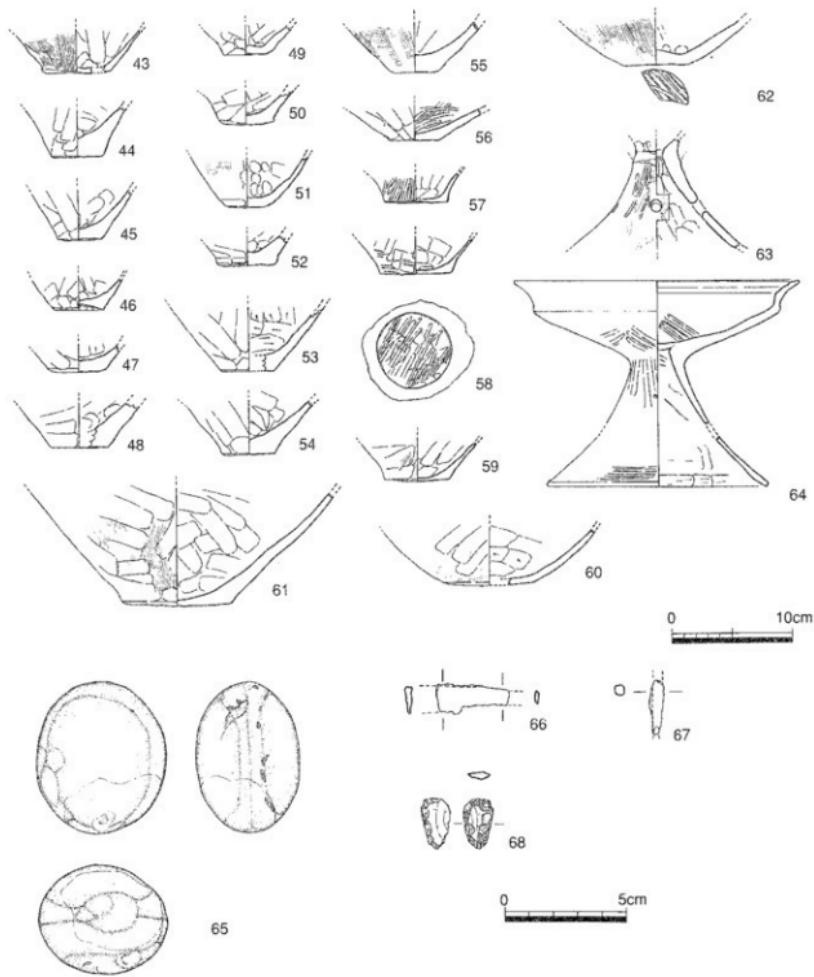
がり口縁部でやや内湾する。底部には径8mmの穿孔がある。

(甕)

17は内外面ともハケ調整が主として見られる。内面は接合痕が明瞭に確認できる。19は内面の頸胴部境の直下に強い横ナデが見られる。20は外面胴部中位にタタキ痕が見られる。内面ではこのタタキ痕から上位で接合痕が数条明瞭に見られる。外面の胴部最大幅から下位は煤の付着によって黒化している。21は底部である。20と同一個体の可能性が高い。外面にタタキ、内面に指揮さえが見られる。22・23・26は下川津B類土器である。22の口縁端部は上方につまみ上げシャープなつくりである。内外面とともに胴部上端は丁寧な横ナデが見られる。23は外面にやや粗いハケが見られる。口縁端部のナデはあまり強くない。26は22と同一個体になる可能性もある。21・25はやや小型の甕である。内面の頸胴部境は稜線をなす。25は浅黄橙色を呈し器面は脆弱である。胴部から薄く短い口縁部を作り出している。内面には接合痕と指揮さえが明瞭である。27は口縁部の一部を欠損するのみでほぼ完形である。外面には全面にヘラミガキが見られる。胴部下半は煤による黒化がみられ、底部周辺は特に被熱のために赤色化成は器壁が剥離している箇所が顕著である。28は内面が黒化している。頸胴部境は稜線を有し、内面上半は接合痕が顕著である。29は内面の頸胴部境に稜線をもち、口縁部にかけては細長く外反する。口縁端部はナデが見られやや上方につまみ上げるがあまり強くない。

(底部)

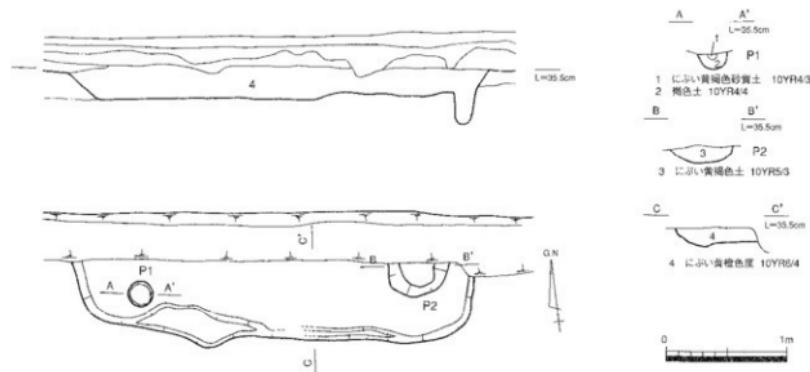
30は大きく横に広がる脚部をもった底部である。浅黄橙色を呈し軟質で断面は黒色を呈する。31は角のとれた底部を有する。内外面ともナデが顕著である。32は底部下面にまでハケが見られる。34は外而全体にナデ、内面も下端はナデであるが、底面から約3cm上位からケズリが確認できる。35はSH01資料で唯一痕跡的な底部を有する。底部下端とその周辺にはタタキが見られる。36はしっかりとした平底を有する。断面から内面にかけて黒色を呈する。37は薄手である。内面にはケズリが密に見られる。38は内外面にナデが見られるが、底部下端はハケが残る。39は胎土に砂礫を多く含む。40は脆弱な器面である。41は底部内面の下端が凹み、底部中央の器壁が薄い。42は底部の角がとれ、下端から胴部外面にかけてヘラミガキが見られる。43は薄手で器面は堅緻である。44は底部が厚い。外面はタタキをナデで消している。45は内面下方に板ナデが見られる。46は底部外下端が凹む。47は底胴部境の剥離が顕著である。48は赤色粒が多い。49は底部内面下端が若干突出する。50は外面が煤による黒化と胎上の赤色化が見られる。51は内面に指揮さえが顕著であ



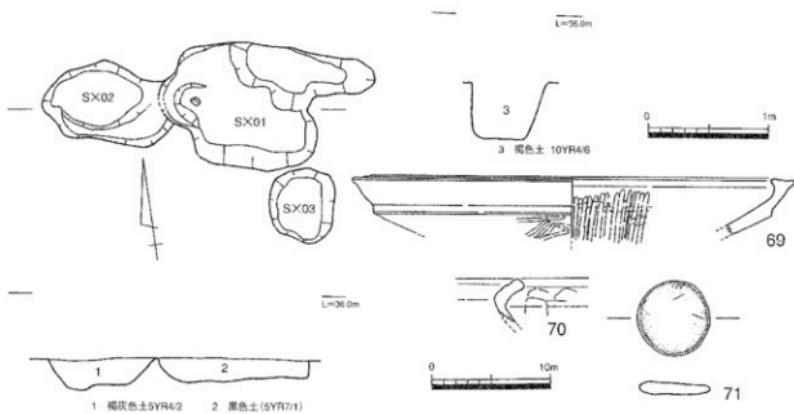
第9図 SHO1出土遺物 (3) (1/4) (1/2)

る。52はやや突出する底部である。53の内面は密なケズリが見られる。54は胴部下端に若干粘土がはみ出でおり、突出気味の底部を呈する。55は灰黄褐色土を呈する。56～60は下川津B類土器である。56は外面上に強いナデ、内面にヘラミガキが見られる。57は外面上端にヘラミガキが見られる。58は外面上にヘラミガキ、内

面にケズリが見られる。外面上のヘラミガキは底部外面上端にも密である。また、胴部下端にはタタキの痕跡が認められる。59は長石を多量に含む。60は残存部分において外面上全体が黒色を呈する。61は底径7.8cmの大型壺の底部である。底部外面上端はケズリ痕を残しナデは施されていない。62は底部外面上端にヘラミガ



第10図 SH02平面・断面図 (1/40)



第11図 SX01・02・03平面・断面図 (1/40) 及びSX01出土遺物 (1/4)

キ、洞部外面にハケが見られる。

(高杯)

63は杯部が剥離した高杯の脚部である。残存部分で3箇所の円形の透かし孔が見られ、当初は4箇所であったと推察される。外面には密なヘラミガキ、内面にはナデが見られる。64は下川津B類土器の高杯である。脚部に透孔が見られるが貫通しておらず痕跡的である。杯部は口縁部付近で屈曲し、口縁部にかけてやや強い横ナデが見られる。

(叩石)

65は安山岩製の叩石である。全面に光沢がある。一部赤色をした箇所がある。

(鉄製品)

66は刀子片である。刀身部は幅約1cm、柄部は長さ約2cm以上で柄頭につれて幅が狭くなっている。67は鉄錆の茎の可能性があるが断定できない。断面は隅丸方形形状を呈する。

(サヌカイト片)

68は長さ2cm幅1cmのサヌカイト片である。SH01

では他にサヌカイト片は小片が2点出土している。

(2) SH02

① 検出状況

S H01の東に隣接して検出した。遺構のほとんどが調査区外である。住居は東西長3.3mの方形プランである。調査区北壁からは1m検出している。検出面の標高は約35.5mである。

② 形態・構造

床面は検出面から約25cm下でほぼ平坦である。床面では堅穴住居跡に伴うピットを2基確認した。P 1は住居跡南西隅に位置し径約20cm、深さ約15cmを測る。P 2は径約50cm、深さ約15cmである。また、調査区北壁において壁面にピット状の落ち込みを確認したが、ほとんど調査区外であり平面で確認することができなかった。床面は貼床等の造作は見られない。遺構面であるベース土は西側が安定した黄褐色シルト、東側はその下層に堆積している砂礫を含んだ層である。

③ 遺物

S H02内では出土した遺物は皆無である。

(3) SX01、SX02、SX03

① 検出状況

調査区中央の南半で3基の遺構が隣接して検出された。SX01を中心にはり合ってSX02、SX03が位置する。

② 形態・構造

SX01は長さ約1.8m、幅約1mの不整形を呈し、埋土は黒色の炭化層であった。床面も凸凹である。深さは約20cmを測る。

SX02はSX01に切られている。長さ約1m、幅約65cmの楕円形を呈する。深さは最深部で約25cm、埋土は褐色土である。

SX03はSX01の南に隣接する。径50~60cm、深さ40~50cmである。埋土は褐色土が認められる。

② 出土遺物

(SX01)

SX01からは弥生上器、円盤状石製品、サヌカイト片が出土し、古代以降の遺物は認められない。

69は高杯の杯部である。脚部から外方に立ち上がり口縁部から2cm下位で屈曲する。口縁部は幅1.5cmに肥厚させ、端部に3条の沈線を施す。杯部外面下部、内面にヘラミガキが見られる。隣接する井戸内にも同様の高杯片が数個体認められ、同一個体である可能性もあるが接合関係はない。70は甕口縁部である。頸部外面に煤が付着している。71は円盤状の石製品である。

表面は整ったメンコ状の円形に磨かれている。

その他、図示していない遺物として甕胴部、下川津B類土器片、サヌカイト剥片などが見られ、おおよそ弥生時代後期中葉の時期が想定される。

(SX02)

SX02からも弥生時代後期中頃の土器片が数点出土した。全て小片で図示できなかった。

(SX03)

遺物の出土は認められなかった。

中・近世の遺構

(4) SE01

① 検出状況

調査区中央の北半で検出した。北にSH02、東にSX05が隣接する。検出時において円形を巡る井戸の輪郭が認められ、その中央に土抗（SK04）を確認した。

② SK04

SK04は長径約70cm、短径約55cmの楕円形を呈し、深さは20cm程度で埋土に灰黄褐色土が見られた。この遺構は井戸の埋土を掘りこんでいることから後出する土抗と判断したが、井戸の掘削の結果土抗直下が井戸中心部分になることが明らかになった。このような位置関係については偶然と解釈することも可能だが、井戸との密接な関わりも推測される。

出土遺物は鉄片、上師質土器片、陶磁器類があり、すべて小片で詳細は不明であるが、井戸からの出土遺物と同時期といえる。

③ SE01の構造

遺構面で検出した平面形態は東西約3.3m、南北約2.7mの楕円形である。上面では石組ではなく、石組が認められるのは上面から1.4m下位である。

石組内法は東西約0.9m、南北約0.75mで、上位の掘り込み面と同じ方角に長軸をもつ。石組の深さは3mを測り、検出面からの縦高は約4.4mである。

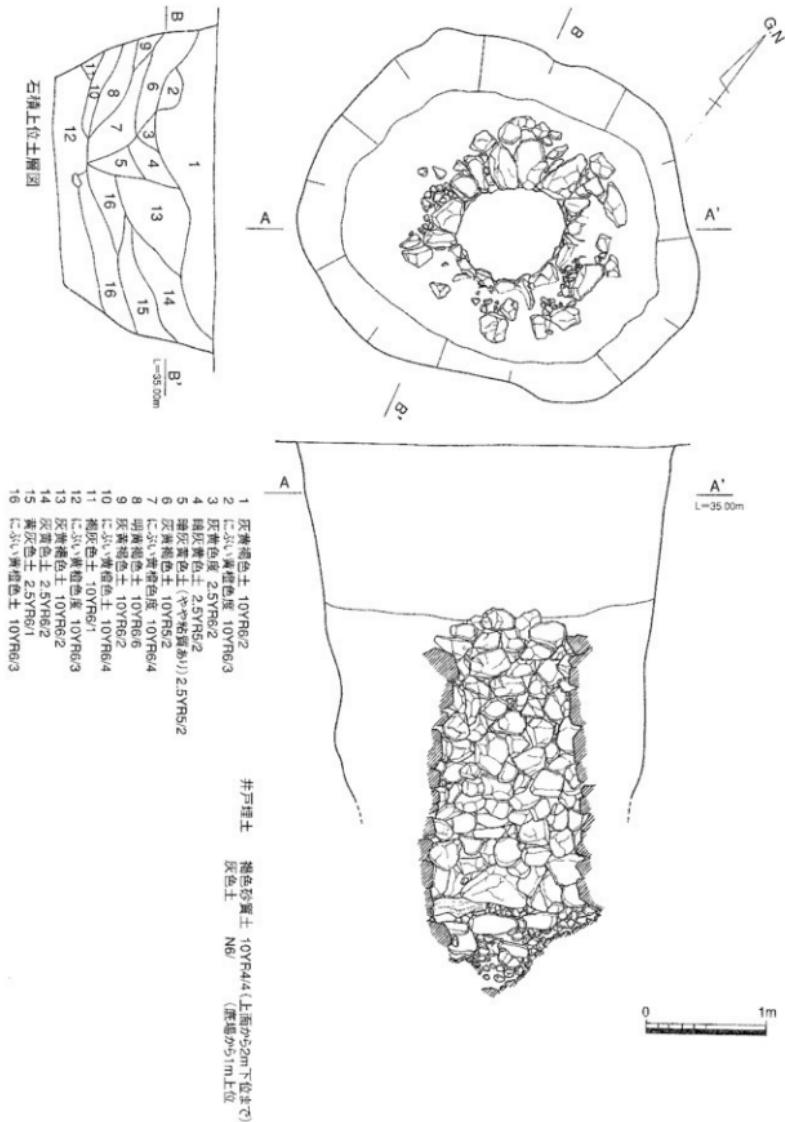
④ 石組から上位の掘込み

石組から上位の掘込みの断面は逆台形をなす。石組直上の層は水平堆積し、上位は壁面から中心部に向って傾斜して堆積している。堆積土は小礫を多く含む粗い土であるが石組や裏込め土に使用されていたものと同類の石材はほとんど認められなかった。最上位の堆積土は灰黄褐色土で遺構内一面に堆積が見られる。

遺物は石組内遺物と接合関係にあるものが多く、石組内の埋没と近い時期に短期間で埋まった可能性がある。また、SE01に東接してSX05があるが、この埋土中の遺物の1点はSE01石組内の遺物と接合しておりこれらの遺構がほぼ同時期に機能を失い埋土していたことが推測できる。

⑤ 石組の構造

石組は長さ30cm程度の花崗岩の塊石を小口積によっ



第12図 SE01平面・断面図 (1/40)

て石積されている。隣り合う石材は互いに一部を重ね合わせることによって強度を上げている。右側の裏側には10cm以内の小礫を多用している。小礫は化成岩片であるが、小礫に混ざって板石状の流紋岩片も多く認められる。石組から掘込みの壁面までは長軸側が約1m、短軸側が0.5mで、長軸側の方が余裕をもって裏込めがなされている。右組上面は整形された石組ではなく、各石材は若干の高低差がある。東側は上面で丁寧な小口積の様子が見られるが、東側は一段分石組が低く、また、裏込め付近に石組を構成していると推察される石材が見られることから、現状での上端は石材が抜き取られた状況を示していると推察される。

石組の断面形は下方に向って少しづつ幅広になる。最下部で東西幅約1.2mを測り、上端よりも約30cmの幅広である。

井戸の埋土は上面から2m間は褐色砂質土である。上層の崩落により堆積層の細分はできなかった。一方、底場から1m上位間は灰色土であり、潜水状態にあったことが解る。

底場から70cm上位は50cm以上の大型の塊石が石組に見られ、その下位は自然木や裏込め石と同法量の小礫が見られ、その下位には再び横長の塊石が上位の石組からは少し内側にせり出している。この石材から下位は底場にかけて小礫が見られる。小礫の底場は中央が窪み椀状を呈している。底場の標高は約31mである。

底場と同じレベルの井戸周辺の堆積土の様子は確認できなかった。造構の壁面等で観察された最下位の堆積土は砂礫層で標高33m付近である。従って、井戸の底場が湧水層であるかわからないが、標高33mから石組上面である標高34m地点までは砂礫層が厚く堆積している。なお、調査時には全く湧水ではなく、水脈の変化が指摘できる。

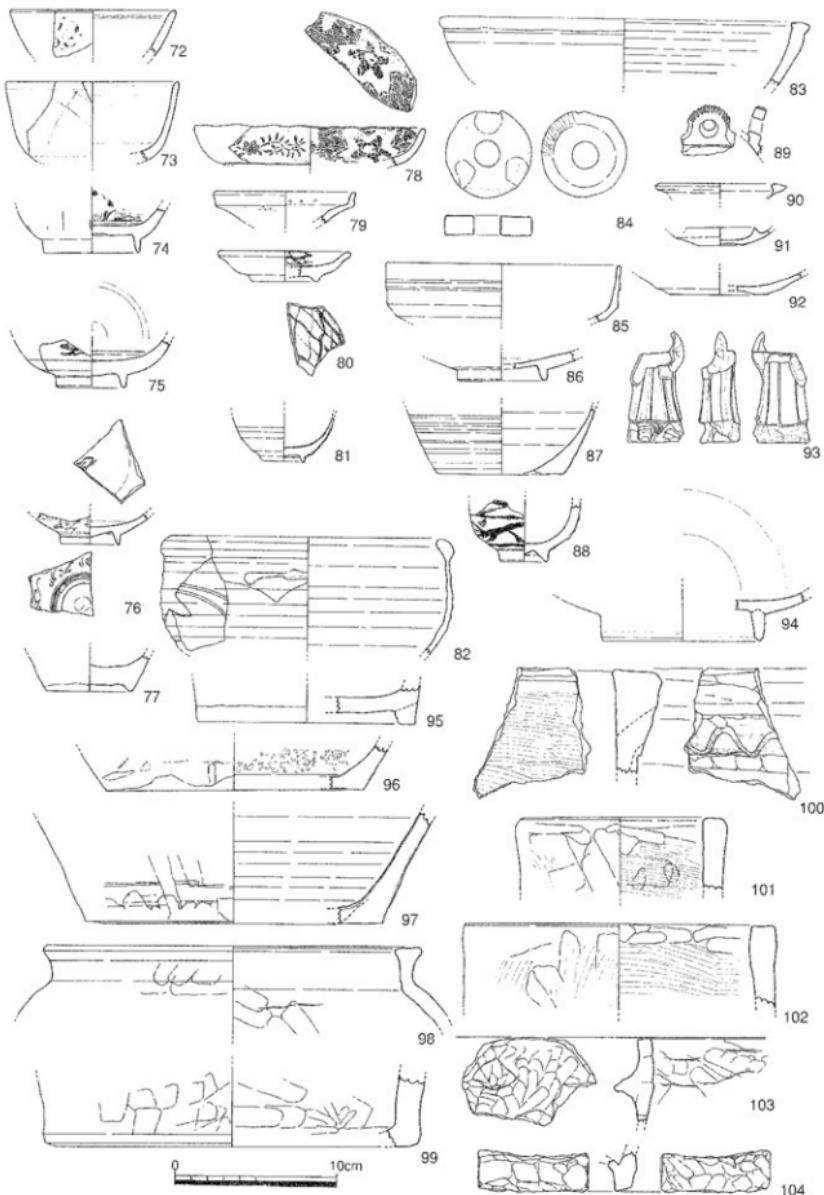
⑥ 出土遺物について

出土遺物は石組上位の掘込み内、石組内部、石組裏込め石内で分けて採集している。石組内部の上位2mの褐色砂質土と下位1mの灰色土で分けて取り上げる必要があったが、石組み内の資料は一括で取り上げている。

出土した遺物は骨生上器、須恵器、瓦、土師質土器、近世陶磁器、陶器類、鉄製品、ガラス製品、木片がある。

72は瀬戸・美濃系陶器広東施である。太白手。外面に四弁花文を染付で描く。73は肥前系磁器の端反碗である。外面に斜格子文が見られる。石組上位の埋土と石組内埋土の破片が接合している。1820~60年の時期。74は肥前系磁器鉢で蛇の目凹形高台(高)である。幕末前後。75は肥前系磁器の端反碗である。内面は蛇の目釉剥ぎが見られる。19世紀。76は肥前系磁器丸碗で

ある。見込み、底部外側の中心付近が若干突出する。見込みに文様が見られる。77は肥前系磁器の袋物である。底部は甚箇底で高台は露胎である。底部外側には放射状の工具痕が見られる。78は肥前系磁器輸入皿でコバルト呉須を用いた型紙摺りの文様が見られる。内面が花文、外面が唐草文である。明治期の所産である。79は肥前系磁器、青磁仏化瓶である。18世紀後半。80は肥前系小皿である。口縁部は端反り、内面に染付による斜格子文がある。19世紀前半の時期。81は肥前系磁器小碗である。疊付にアマナ砂が付着し、淡橙色を呈する。82は施釉陶器鉢である。口縁部は玉縁をなし、外面は白泥によるイッチン掛けが見られる。石組上位の埋土と石組内埋土の破片が接合している。83は肥前系施釉陶器鉢である。口縁端部は露胎で胎土中に長石の小粒がある。石組上位の埋土と石組内埋土の破片が接合している。84はドーナツ状の磁器である。上下面は露胎一面に橙色の目痕が3点見られる。側面の一部や内側の環状部の側面は施釉されている。85は大谷焼碗(せんじ碗)である。胴部下半が脱く肩曲し、胴部外側には2条の鋭い突線がある。内面は釉のかかりの不十分な箇所がある。19世紀。86は大谷焼碗の底部である。ケズリによってシャープな形態をなす。胴部下端から露胎で高台内の底部は薄手に作られている。見込みには砂目が円形状に見られる。87は大谷焼徳利(壺)である。底部は同心円ケズリで露胎である。断面は赤褐色を呈するが底部下端の一部は灰黄色を呈する。88は秋焼碗である。外面にビラ掛けがみられ、内面は厚い白色の釉薬を全面に施している。高台はケズリで整形され、高台内は輪轂軸によって中心部が突出する。19世紀末。89は施釉陶器土瓶である。外面に明赤褐色の釉薬を施す。内面は露胎である。明治~大正の時期。90は施釉陶器のおとし蓋である。外面に赤褐色の釉薬を施す。91は京・信楽系陶器灯明皿である。内面に仕切りを有する。92は京・信楽系陶器灯明皿である。内面に目跡が見られる。93は瀬戸・美濃系磁器人形である。上半身を欠損する。袴を履く。底部外側は露胎で中央に1辺3mmの方形孔が見られる。19世紀から明治期。94は施釉陶器鉢である。疊付、高台内は露胎である。見込みには蛇の目釉剥ぎが見られる。95は断面方形の高台を有し、外面は高台から胴部にかけて直に立ち上っている。外面には白色釉が、内面には局部的に緑色の釉が付着している。高台、高台内部は露胎である。96は施釉陶器盤である。底部は平底で胎上は浅黄橙色を呈し内外面に鉄釉を施す。底部内部に砂が付着する。97は大谷焼の壺底部である。胎上は赤褐色である。胎十中には細かな長石粒が見られる。外側に鉄釉を施し、底部内面には長石粒、植物纖維の付着が見られる。98は十師質上器甕である。口縁部が短く直立し外側に拡張している。内面上位から口



第13図 SE01出土遺物 (1) (1/3)

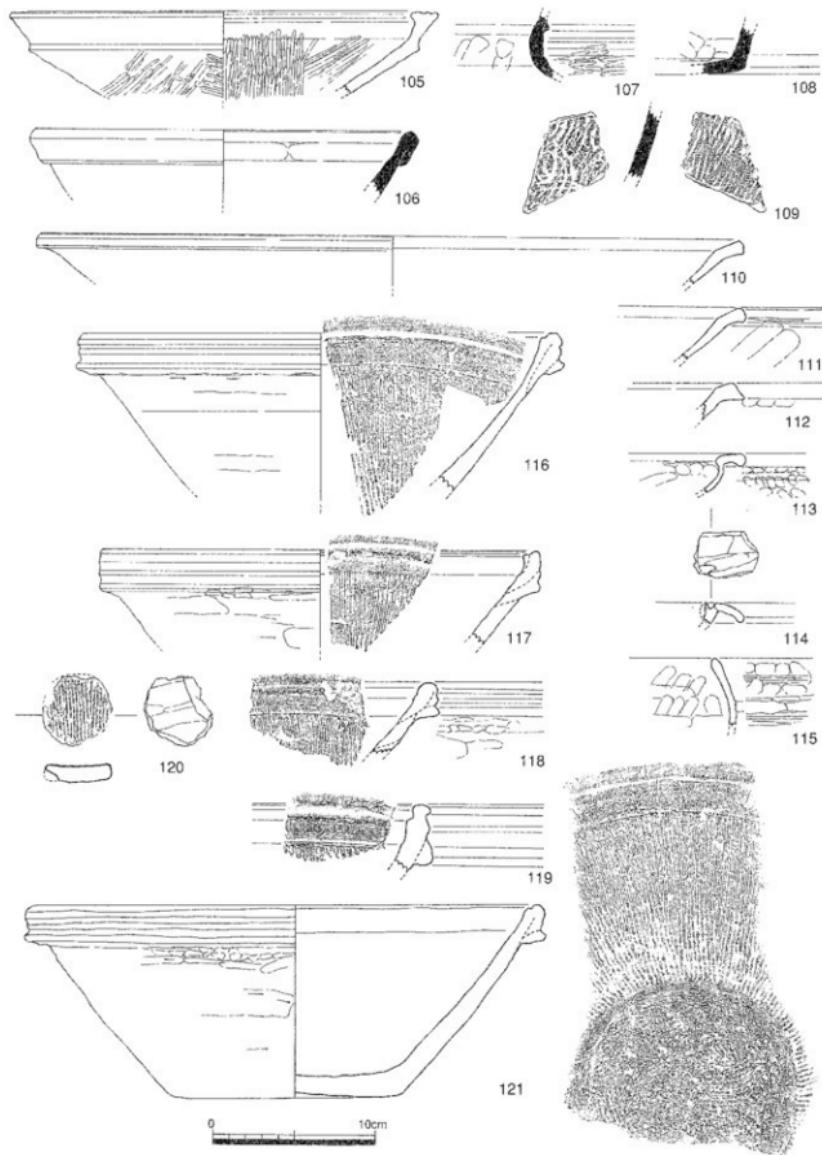
縁部にかけて若干瓦質になっている。断面は全体的に灰色層が見られる。99は土師質土器甕である。胎土に多量の長石粒とともに雲母・角閃石を含む。胴部下端は若干外側に張り出し底部との境はナデによって面を造り出す。底部の器壁は薄い。100は土師器甕の口縁部である。胎土に雲母・角閃石を含む。口縁部を肥厚させ、外面は粘土を貼り付け文様帯を整形し、波状文を施す。内面には横ハケが見られる。101は土師質土器の口縁部である。胎土に雲母・角閃石を含む。外面はナデを施すが、消えきっていないハケが一部見られる。外面は横ハケを施し上端付近はナデによって角がとれている。内面は全体に煤の付着が見られ、口縁部上端にまで及んでいる。102も101と同様の土師質土器の口縁部である。胎土に雲母・角閃石を含む。外面はナデが施されているが一部ハケが残っている。内面は横ハケ、口縁部付近は横ナデが見られる。煤は付着していない。103は土師質土器口縁部である。内面に約1.5cmの突起を有する。口縁部上端はナデによって面をなす。火鉢か？104は土師質土器の脚部か？長さ約7cm、高さ約2.5cmの長方形を呈する。内外面はナデ、側面、下端部は工具痕によって平坦に仕上げている。胎土に赤色粒を含むが雲母・角閃石は見られない。

105は弥生七器高杯である。口縁部を水平に肥厚させ、端部に3条の沈線を施す。内外面にヘラミガキが見られる。106は須恵器の口縁部として図化した。玉縁状に肥厚し、内面には強い横ナデが見られる。器面はローリングによる摩滅が見られる。107は須恵器甕の頸部。胴部上端から頸部の一部にかけて平行タタキが見られる。また、頸部には断面半円形の突帯が見られる。断面は赤紫色を呈する。108は須恵器壺の底部である。胴部下端に幅0.8cmの工具痕が見られる。断面は灰赤色を呈する。底部の器壁は薄い。109は須恵器甕である。外面に平行タタキの後にカギ目、内面には同心円の当具が見られる。110～114は瓦質焙烙である。110・111は型成形で外面に剥離材に用いた砂が付着している。内面は纏繩による丁寧な横ナデである。112は型成形で口縁部下端を下方につまみ出している。113は胴部外面に指押さえ、内面には不整方向にナデが見られる。外面から口縁端部まで煤の付着が見られる。114は胴部外面に指押さえが見られる。内耳を持ち、穿孔が貫通している。115は瓦質剥金である。胴部から口縁部にかけて内傾し、口縁端部は丸くおさめる。鈴は剥離しており、鈴部から下位に煤の付着が見られるが、破損した鈴部分にも一部煤の付着が確認できる。116～119、121～123は堺・明石系擂鉢である。116は口縁部外縁帶の下端が外に大きく張り出し、下面につよいナデが見られる。内面は凸帯が小さく段状になっている。石組上位の埋土と石組内埋土の破片が接合している。白神編年II型式。117は口縁部外縁帶

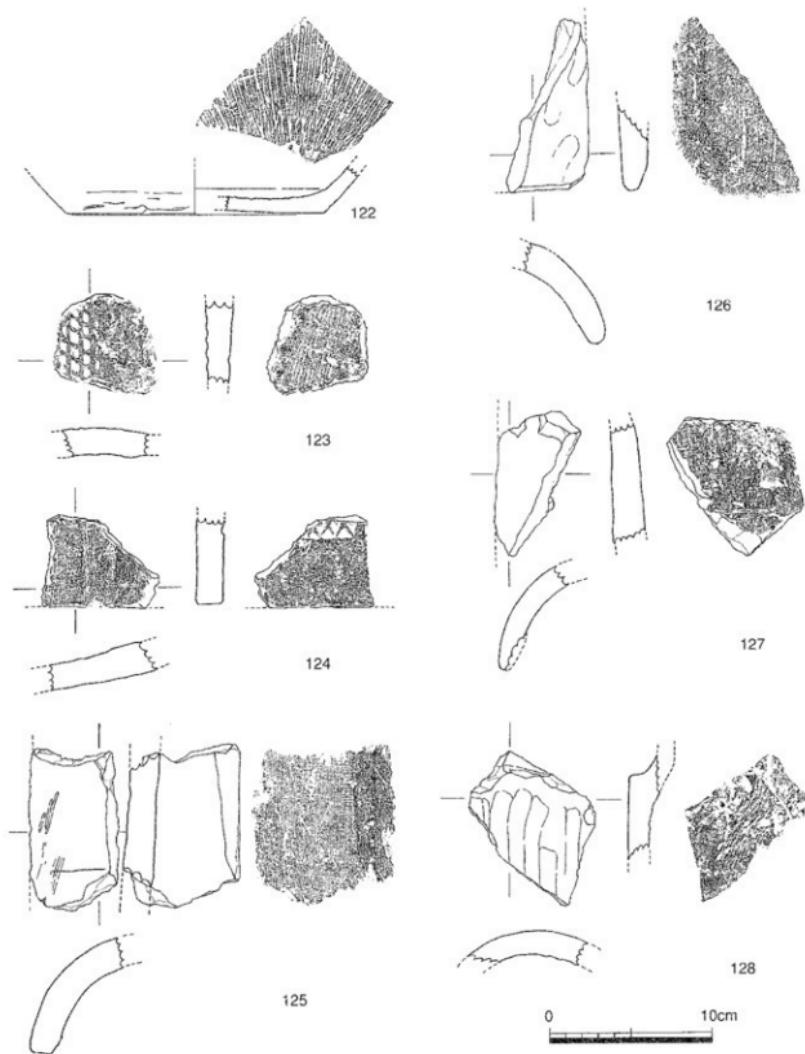
に2条の凹線を巡らし、凹線間にはナデを施し平坦になっている。外縁帶下端はあまり突出していない。内面は摺目上端の摺目間にやや隙間があり、摺目の上位は横ナデを施し、その上位には三角形状の突出が見られる。白神編年I型式。118は口縁部外縁帶の下端が突出し、内面は摺目上端に横ナデを施し、その上位は弱い突出が見られる。白神編年II型式。119は幅広の口縁部外縁帶を有する深い凹線が2条見られる。外縁部下端は突出するあまりよくなく、丁寧な横ナデが施されている。内面は摺目上が2段の段となっている。白神編年II型式。120は備前焼の摺鉢を利用した円盤状土製品である。121は口縁部外縁下端が強く突出し、外面の凹線及び外縁帶の幅の矮小化している。内面の突出も痕跡的である。底面部内は使用による摩滅が見られ、ウールマーク状の摺目が見られる。白神編年II型式。122は底部から胴部片である。橙色を呈し、胎土に大粒の礫が混じる。

123・124は平瓦片である。凹面に布目压痕、凸面に格子タタキが見られる。格子タタキには部分的にナデ消しが見られる。古代の瓦。125は丸瓦である。凹面に布目压痕、凸面にナデが見られる。胎土に7mm程度の良石を多量に含む。古代～中世。126は丸瓦の胴部広端面である。焼成は良好な瓦質で外面の一部は銀化している。凹面は内タタキとコビキBが、凸面はヘラナデが見られる。127は灰色をなす丸瓦である。凹面にコビキB、凸面にヘラナデが見られる。瓦質であるが銀化は見られない。128は丸瓦の連結部である。全体に銀化、黒化している。内面に刺子痕、外面にヘラナデが見られる。129は丸瓦の連結部である。凸面側面の削りは狭く、凹面側面の削りは幅広い。凹面には3条の内タタキが見られる。外面は瓦質であるが、銀化はしていない。130は丸瓦の連結部である。凹面側面の削りが幅広に対して凸面側面の削りは狭い。凹面に3条の内タタキ、また、その隙間に刺子痕が確認できる。凸面はヘラナデが見られる。外面は瓦質であるが、銀化はしていない。131は軒丸瓦の瓦当面である。文様部に銀化が見られ、内側は煤の付着が見られる。132は軒平瓦である。唐草が大きくなり込みながら二転している。上方には瓦当接合面の凸凹が見られる。133・134は土師質土器足釜の脚部である。133は断面円形で全体にナデが見られる。134も断面円形で面取り状のナデが見られる。

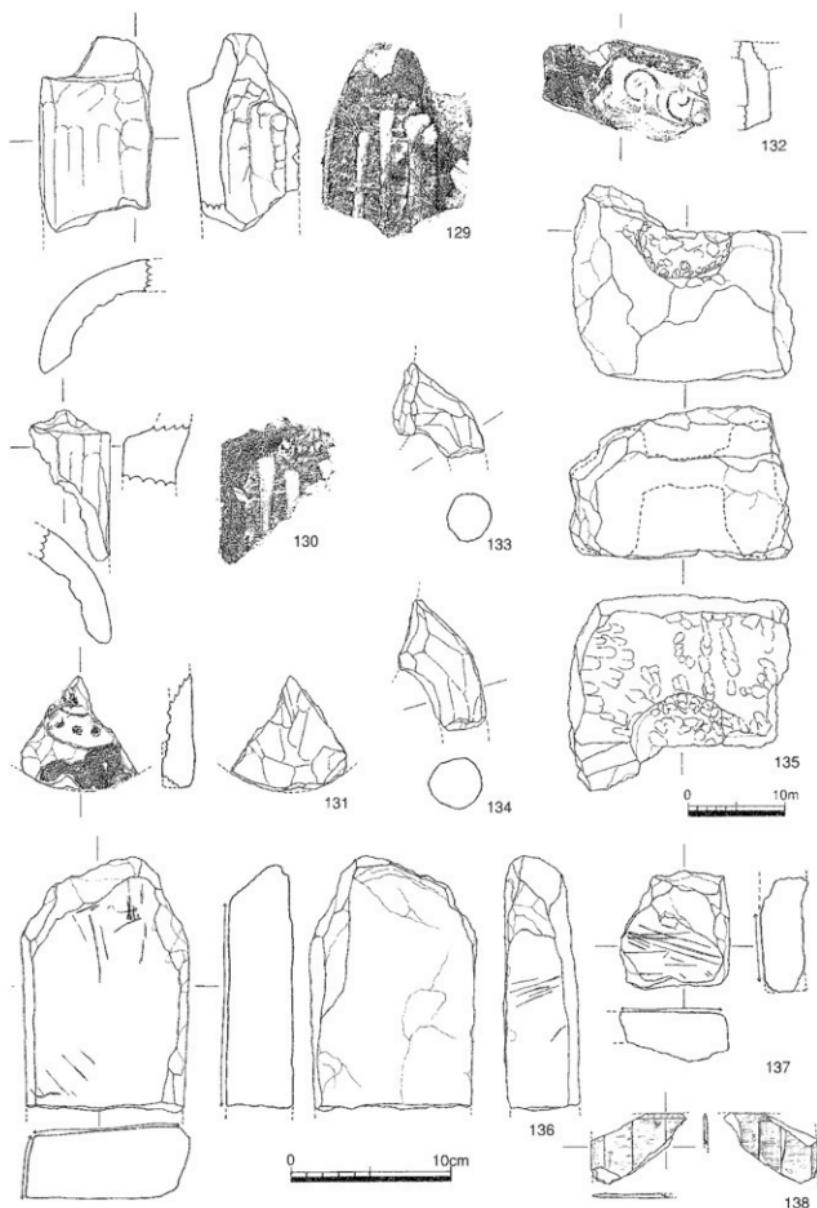
135は安山岩製の石造物である。形態的特徴から五輪塔火輪が推察されるが、本来五輪塔は凝灰岩製であり当例は検討を要する。上端にはぞ穴があり、側面は一面以外破損している。136・137・138は砥石である。136は砂岩の砥石である。不整形の長方形を呈し、上端面、両側面に使用痕がある。裏面、短軸側面に使用痕はない。137は流紋岩製の砥石である。方形を呈



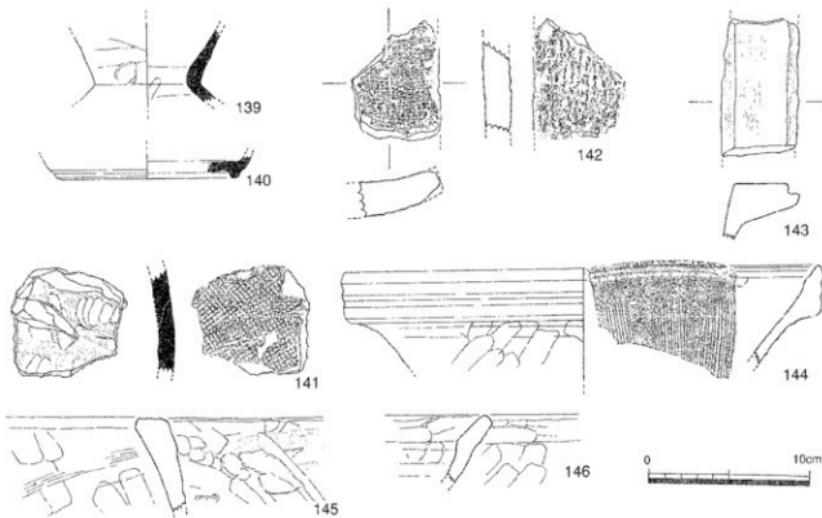
第14図 SE01出土遺物（2）（1/3）



第15図 SE01出土遺物 (3) (1/3)



第16図 SE01出土遺物 (4) (1/3、135は1/5)



第17図 SE01裏込め石内出土遺物 (1/3)

するが欠損部が多い。一面のみに使用痕がある。138は安山岩製の砥石である。薄手の表面に細線の使用痕が密に入る。

139～146は井戸の裏込め石の中から出土した遺物である。139は須恵器壺の胴頸部である。器面は摩滅が顕著である。断面は赤紫色を呈する。140は須恵器の底部である。杯の可能性が高い。断面方形の高台を有する。9世紀頃。141は須恵器胴部である。外面に格子タタキ、内面にハケと指押さえが見られる。142は瓦片である。凸面に繩目(タタキ)、凹面に布目が見られる。143は上質の製品であるが用途不明である。外向は全面に丁寧なナデが見られる。144は備前焼の猪鉢である。口縁部外縁は黒褐色の釉が付着し、胴部と色調が異なる。内面の滑目は比較的間隔をあけて施している。胴部外面は丁寧なナデが見られ器質も薄い。17世紀代が推察される。土師質上器の口縁部である。外面の調整は粗く、内面にはかろうじて斜めハケが見られる。胎土は多量の長石粒を含む雲母・角閃石は見られない。断面は黒色層が見られる。149は井戸周囲の埋土からの出土で裏込め石中からの出土ではないが、井戸掘り方内の可能性があるため掲載した。土師質上器鍋の口縁部である。外面はほぼ直線的に口縁部に至るのに対し内面は胴部との接に稜をもつ。口縁端部はナデによって面をなす。胎土は石英、長石、赤

色粒を含むが雲母・角閃石は見られない。

(5) S X04、S D01

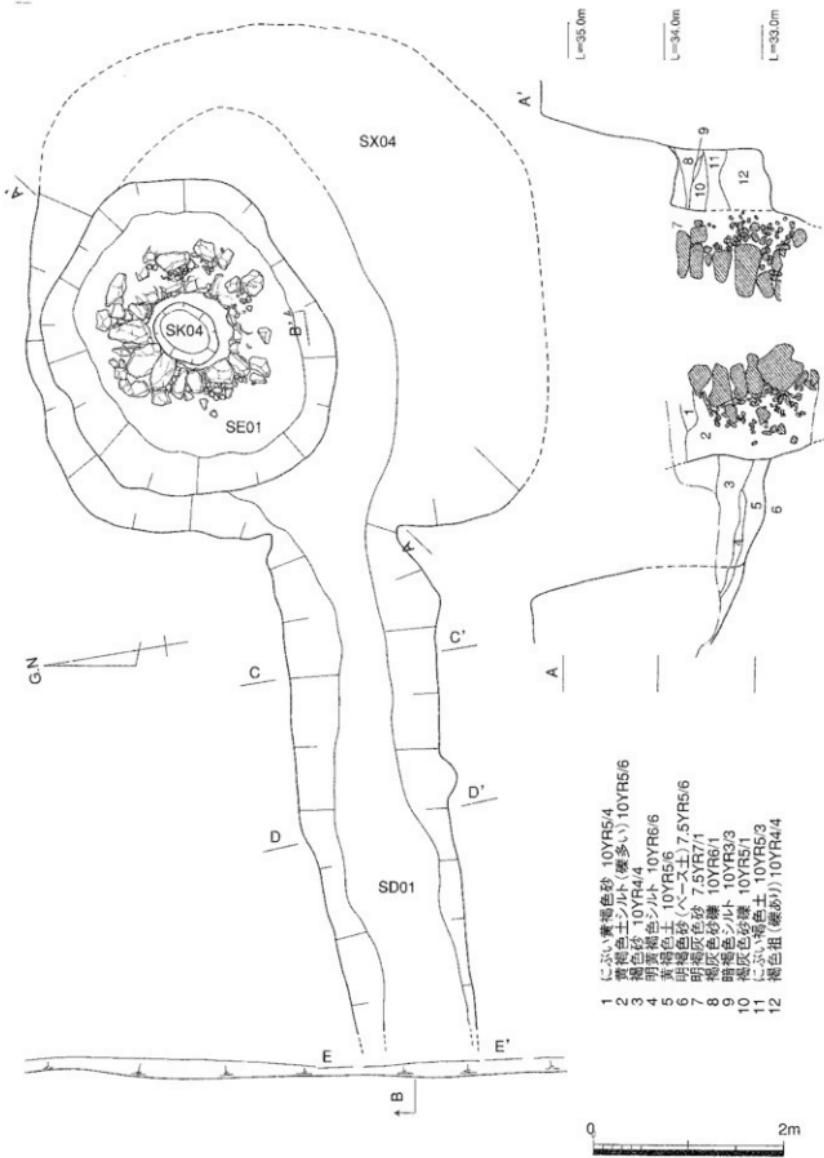
SE01を包み込む広い範囲で S X04を確認した。また、S D01は S X04への導水施設として調査区西壁から直線的に S X04に連結している。

調査当初において S D01は SE01への導水施設と理解していたが、SE01の石組観察のため重機で深堀掘削を行なったところ、SE01のさらに外側で S X04を確認するに至った。そのため、S X04の平面形は東側が十分に捉えられず、破線は床面、或は傾斜面からの復元である。以下では S X04、S D01の順に個別説明を行う。

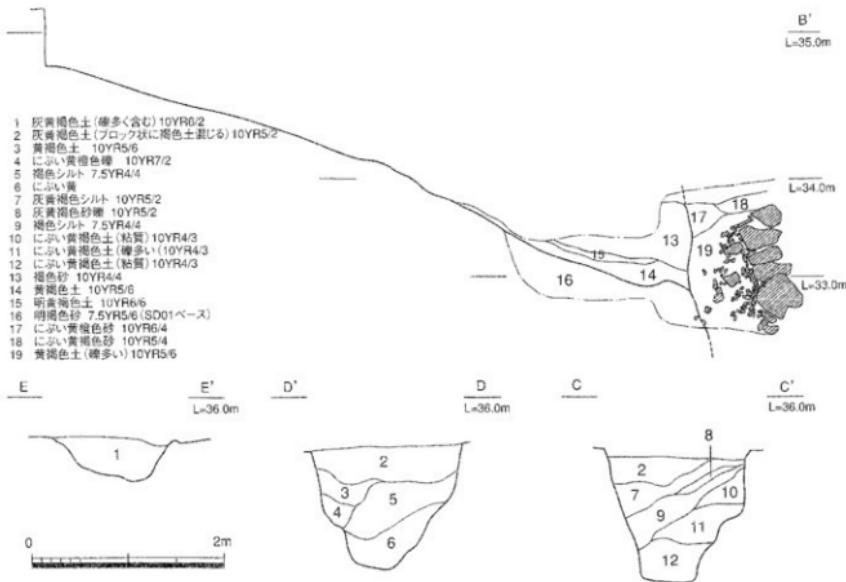
S X04

東西5.5m、南北5.5mの隅丸方形に復元される。深さは底場から掘り方の立ち上がる地点でベースから約2.5mを測る。底場は中央部に向って傾斜するが、中央部はSE01によって切られている。残存箇所の最も深い場所でベースから約2.5mを測る。床場は砂地である。

埋土は全体の十層の作成ができなかったが、作図で下層の様子、掘削時の観察からは砂疊層とシルト層の互層が見られる。



第18図 SX04平面・断面図及びSD01平面図 (1/50)



第19図 SX04・SD01 断面図 (1/50)

遺物は少ないが、弥生土器、須恵器、中世上師質土器、近世陶磁器等が見られ、近世以降の遺構といえる。SD01

調査区西壁から傾斜して下り SX04に合流する溝状遺構である。SX04とは切り合い関係がみられず一連の遺構と考えられる。幅約1.5m、調査区内における長さ約5.5mで主軸の方位はほぼ東西である。

西壁では深さ約0.4m、底場の標高35.1、SX04との合流付近では深さ約2.2m、底場の標高約33.1mを測り、調査区間で比高差約2mを測る。底場の傾斜は途中に大きな傾斜変換もなく、約30°で降っている。

溝の断面は西壁では比較的幅広の不定形な底場を有するのに対して、底場の深くなつた東側では断面逆台形で、底場は幅狭の平坦地をなす。側面の立ち上がりは場所によって異なり、直線的にベース面まで立ち上がる箇所もあれば階段上に立ち上がる箇所もある。

埋土は砂礫層とシルト層の互層からなり、漏水を示すグライ士は見られなかった。土層は縦断面を観察したC-C'は南から北に層の傾斜が見られる。SE01とは上層において切り合い関係が確認できた。

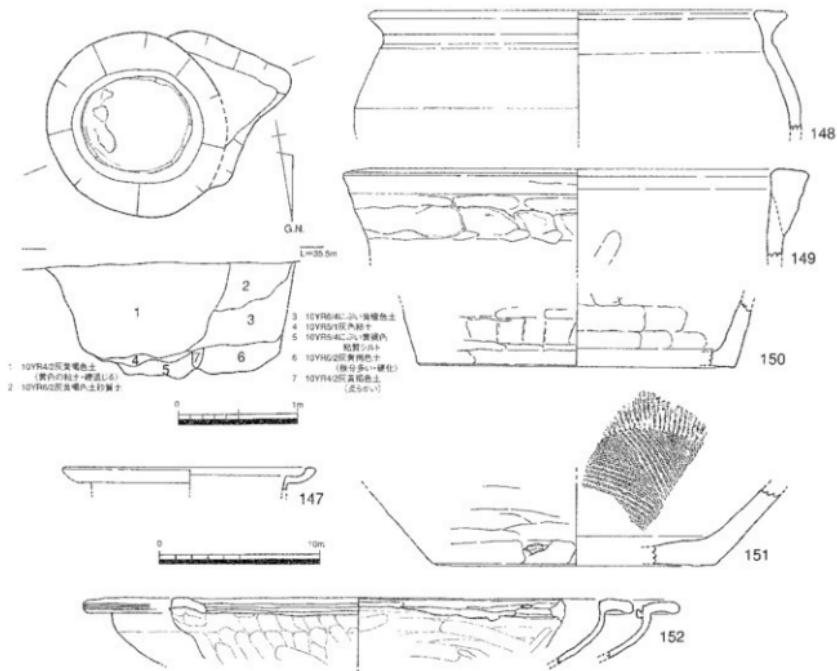
出土遺物は非常に少なく、土師質土器数点と鉄製品に留まる。土師質土器は多くが弥生土器と思われるが中・近世の可能性のあるものもある。ただし、細片のため断定できない。鉄製品は断面が方形を呈し、鉄釘の可能性があるが用途、時期等を断定できない。現状で時期決定は困難ではあるが、SX04と一連のものと理解して近世の遺構と推察する。

(6) SX05

① 遺構

SE01の東に隣接し、SX04を切っている。円形の土抗の西に三角形状の土抗がつく。上面では切り合い関係が見られ別の遺構と推察していたが、床面は共有することから同一遺構とした。

円形の土抗は径約1.5mの正円で深さ約0.75mである。底場は平坦ではないが比較的面をもち径1mの円形である。埋土は灰黄褐色土をベースとするが黄色のブロック状の粘土や礫が顕著に見られる。床面は硬化しており、断ち割りによって床面には粘土を敷いていることが判明した。粘土の敷設は厚さ約5cmである。



第20図 SX05平面・断面図及び出土遺物 (1/3)

三角形の土抗は断面では円形の土抗に切られていることが確認できる。埋土は砂疊層からなる。床面は同様に粘土が敷かれており、粘土上面は硬化している。

底場は全体に硬化しており、その下部には粘土が敷設されている。粘土の下層にはシルト層が見られ、底場から地山の底場まで約20cmを測る。

この土抗の用途は不明である。時期はSX01を切っているためそれに後出しし、隣接するSE01の陶器片と接合関係が見られた。よって、SE01と同時期の近世後半が推測される。

② 出土遺物

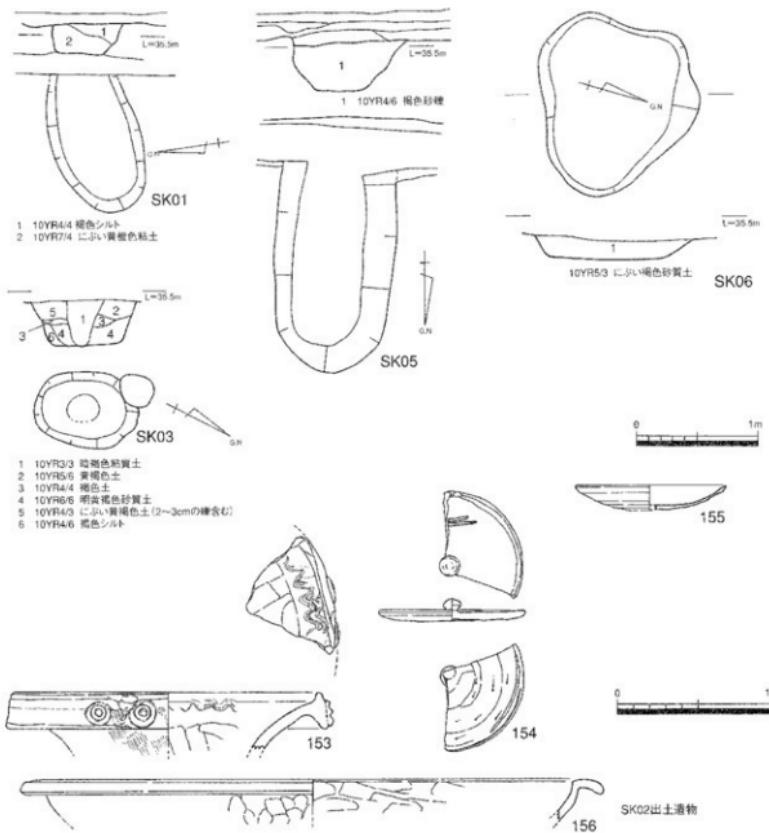
遺物は全て円形の土抗内から出土しており、粘土床以下や三角形状の土抗からの出土はなかった。

147は施釉陶器鉢である。胎土、釉から富田焼の可能性がある。148は丹波焼の甕である。直立する頸部から口縁部が肥厚し、断面T字形をなす。外面上に鉄釉、内面上に灰釉を認める。149は上師質土器甕である。胎土に雲母・角閃石が多く含む。口縁端部を三角形に肥

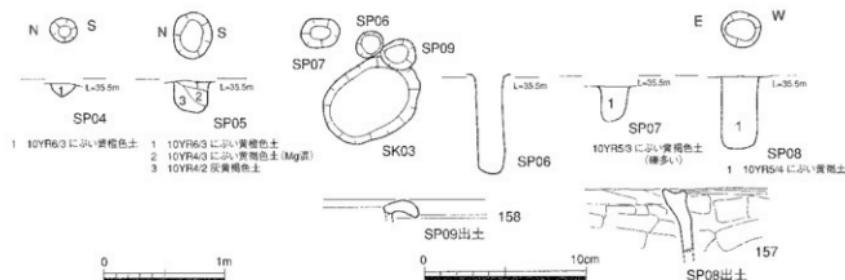
厚し、口縁部下に断続ナデ調整を施した突唇が見られる。内面は全体に煤が付着している。幕末前後。150は土師質土器甕の底部である。胎土に雲母・角閃石を認める。底部の器壁は薄く、内面には煤の付着が見られる。151は捕鉢の底部である。胎上、内面、底部外面は明赤褐色に対し、胎部外面は褐灰色である。内面には重ね焼きの痕跡が胴底部側の幅1cmの灰色の輪となって見られる。152は瓦質の焙烙である。外面に指押さえ、内面に不整方向のナデが見られる。内耳を有するが穿孔は貫通していない。

(7) SK01

調査区南東隅で検出した椭円形の土抗。東側は調査外に入りこんでいる。検出長約1.2m、幅約0.7m、深さ0.25mである。長軸は東西である。検出面は標高約35.5mである。埋土は上位に褐色シルト、下位に焼土であるにぶい黄褐色粘土である。粘土中から出土した上師質土器小片6点は時期を判断することはできない



第21図 土杭（SK）及びSK02出土遺物（遺構1/40、遺物1/3）



第22図 ピット平面・断面図（1/40）及びピット出土遺物（1/3）

が、同じく粘土中から瓦質結体の断部片が出土していることから近世の遺構と考えられる。

(8) S K02

調査区北東に位置する。長軸約1.2m、短軸約1.0mの楕円形の土抗である。埋土からは近世遺物を中心とする出土が見られた。この遺構の直上は近世遺物を主体とする包含層であるにぶい黄褐色土が見られる。

153は広口壺口縁部である。口縁部を下に拡張し文様帯をつくり、中に櫛描波状文とその上から円形浮文を施している。また、口縁部内側にも文様帯近くに波状紋を施す。154は焼締陶器蓋。宝珠つまみを有する。外面は丁寧なナデ、内面にはヘラケズリが見られる。器面には局所的に火薙が見られる。155は前系陶器灯明皿である。口縁端部に煤の付着が見られる。外面はヘラケズリ調整である。156は瓦質結体である。胴部と口縁部の境はシャープな破線を呈する。

(9) S K03

S X04の北西隅に位置する。S P06、S P09、S X04に切られている。長軸約0.9m、短軸約0.65mの土抗である。深さ0.4mで断面は逆台形を呈する。中心に径0.2mの柱根状の痕跡が見られる。

出土遺物は土師質土器や瓦質結体の小片が見られる。

(10) S K04

S E01の項において説明。

(11) S K05

調査区東南に位置する楕円形の土抗である。長軸長は南側が調査区外に入りこんでおり不明である。現状で約2mである。幅は約1m、深さは約0.4mで断面はU字形である。埋土は褐色砂礫層で遺物は土師質土器部片1点である。土器片は胎土に雲母・角閃石を含む。器壁は約1.2cmで内外面にナデが見られる。近世遺物であろう。

(12) SK06

調査区南西に位置する。長さ1.4mの不定形の土抗である。深さ約0.15mである。遺物は認められなかった。

(13) S P01・02・03

調査区東端に位置する。S P01が径約0.2m、S P02・03が径約0.3mを測る。

(14) S P04

S H01の埋土をベースにしている。径約0.2m、深さ約0.1mである。

(15) S P05

S H01の埋土をベースにしている。径約0.3m、深さ約0.25mである。

(16) S P06

S K03に隣接しS X04埋土をベースとする。径約0.2m、深さ約0.8mである。

(17) S P07

S K03、S X04に隣接する。径約0.2m、深さ約0.8mである。

(18) S P08

S H01とS D01の間に位置し、切り合い関係はない。径約0.3m、深さ約0.6mである。埋土から土師質土器鍋が出土している(157)。外面の煤の付着が顕著である。

(19) S P09

S K03を切っている。径約0.3mである。埋土から瓦質結体片が出土している。

近・現代の遺構

(20) 耕作痕

調査区東側では幅約0.1m、長さ2~2.5m南北方向の溝を数条確認した。耕作痕と考えられる。当地は近年まで田畠であり、その頃の遺構であろう。

第4章 まとめ

第1節 弥生時代～古墳時代の遺構について

弥生時代～古墳時代の遺構にSH01、SH02、SX01～03がある。

(1) SH01

S H01は遺構のほとんどが調査区外であり全体像が把握できず、平面形も円形は指向するもの整った円形ではなく、さらに炉跡等の堅穴住居を想定させる床面構造は確認できなかった。報告では床面がほぼ水平である点などから堅穴住居跡として記載したが、他の遺構になる可能性も十分に想定される。

このように遺構の評価としては十分な材料を得られなかったが、遺構内からは多量の弥生土器を検出することが出来、これらの遺物が比較的一括りの高いことからまとめとして、これら上器群の評価を行いたい。

土器は長頸の広口壺、口縁部文様帯をもつ壺、櫃、鉢、甕、高杯からなる。全体的な様相からは小型鉢が皆無であり、底部はほとんどがしっかりした平底である。さらに上器の調整方法はハケ、ミガキが主として見られ、タタキを外面に残す例は少ない。壺は頸の長いタイプ、直立するタイプを主とし、甕は口縁部屈曲部がゆるやかで稜線をもたない。下川津B類土器の甕はやや直立気味の鉢部である。以上の特徴から時期的には弥生時代後期中葉～後葉に位置づけられる。

周辺で時期的に近い遺構として、40m南の平成7年調査の森広遺跡SH338と20m北の平成15年調査の森広遺跡溝資料がある。

S II338は口縁部に凹線をもつ個体が多く、壺の形態等からもSH01より古く後期初頭から前葉である。

溝資料はSH338より口縁部の退化が見られ、SH01に近い様相が指摘できる。内部のケズリが頸部付近まで丁寧に施されていること、底部がSH01資料よりもよりしっかりとしていること、直立する頸部をもった壺は認められないこと、からは若干、SH01よりも古い時期が想定される。

以上からはSH338⇒溝資料⇒SH01の時間差が見られるが、後期初頭～中葉を中心とする遺構が当地に比較的集中して見られることは注目に値する。

最後に上述以外のS II01資料の特徴についてまとめておきたい。内部の調整はケズリがあり顕著に認められない。時期が下るにつれてケズリの上端が下がり、内面上位には指押さえが認められるが、当資料では指押さえあまり顕著ではない。内部はハケ、ナデが顕著で上半には粘土紐の痕跡が明瞭なものが多い。ケズリは第7図1や11に代表されるように部分的にしか確認できない。

第7図7の小型壺はミガキの顕著な精製品であるが、脚付きであること、肩部が下彫れであることから事例が少ないと、また、第7図10の壺に見られる口縁部文様も興味深い。

(2) SX01～03、SH02

S X01は炭化物を多く含む上抗である。出土土器は全て弥生土器であり、高杯がやや古相ではあるが、SH01とほぼ同時期と理解した。この上抗にはSX02、SX03が隣接するが、出土遺物からもこれも同時期のものであり、一連の遺構と推察される。これらの遺構が堅穴住居構造の残存として、例えば炉跡になる可能性も推察される。近世遺構である井戸等にも多くの弥生土器が見られ、SX01出土高杯に非常に類似した事例も認められることから、後世の改変が推察されるものであるが、断定要素はない。なお、周辺で住居跡に伴う柱穴は検出されなかった。

S H02は遺物が皆無で時期決定は出来なかったが、長さ3.3mの隅丸方形を呈することから、古墳時代後期～終末期の堅穴式住居跡になる可能性を想定したい。

第2節 近世の遺構について

今回の調査では遺構表面が床土直下ということから、近世の遺構が数多く確認された。中でもSE01、SX05、SX04、SD01は大規模な遺構であり、今回の調査区のかなりの部分を占める。ここではこれらの遺構の時期的な関係について見ていく。

調査の結果からはSX04とSD01、SE01とSX05が同時期で前者から後者の時期的な変遷が認められた。

(1) 遺構の時期変遷について

S X04とSD01は切合関係がなく、SD01の底場はSX04に向って傾斜していることから、SD01はSX04への導水施設と考えられる。時期は遺物が両遺構とも少なく、SX04はSE01資料の混ざりも想定されるため詳細な指摘は困難であるが、近世であることは間違いない。

SE01とSX05はSX04とSD01が埋没した後に掘削している。両遺構は、遺構内埋土、或は裏込め石等に多量の遺物が認められる。また、両遺構から出土した遺物で接合関係も認められ、機能の密接な関わりが想定される。

遺物の様相は弥生時代、古代を除くと、19世紀以降を主体とする。肥前系陶磁器は端反碗、型紙刷りによるコバルト呉須の皿が見られる。焼物の種類は人谷焼、萩焼、瀬戸・美濃焼、丹波焼、堺・明石焼、備前焼など様々見られ、地元の富田焼も認められる。

遺構が埋没した時期は図示しなかったが、近代以降の陶磁器やガラス瓶、鉄製品が年代を知る材料となる。

これらの遺物については十分な検討が行えてないが、昭和22年の航空写真には井戸は認められないことから、それ以前であることは現段階で指摘できる。

(2) 富田焼の製品について

今回多量の近世～近代の遺物が出土し、その中には当遺跡から2km北に位置する富田焼で知られる吉金窯の製品と推察される遺物も認められた。そこで、富田焼の可能性のある遺物について検討した。

第13図82、84、95と第20図147を富田焼の可能性のある資料として検討した。結果、第20図147は形態、胎土から富田焼の可能性が指摘できた。第13図82については窯出上資料の中にはイッピン掛けをした製品が認められず、また、同様の形態をなす個体は確認できなかった。第13図84については、見込みに蛇の目釉剥ぎをもつ個体は多量が見られたが、同様の足高の高台は認められず、また、疊付け近くまで釉薬のかかる当例のような事例は少なかった。95については同様の形態は認められなかった。以上から図示した遺物では確実に富田焼とされるのは1点のみであったが、図示していない資料において褐色の鉄釉が前面に見られる甕口縁部が形態、胎土で同様のものが窯資料の中で認められ、陶磁器においても皿片1点が同様の文様、胎土であることが認められた。このように数は目立つものではないが、富田焼の製品も今回の調査で確認できた。

(3) SX04とSD01について

SX04とSD01は溜堀と溜堀への導水施設の可能性を推測したい。今回の調査区は北に伸びる丘陵先端の沖積作用によって形成された微高地である。調査区の西は傾斜して下り、梅根川が北流している。つまり、当地は微高地の上端であり、こうした微高地の農業用水としてSX04とSD01が造成されたものと推察する。

遺跡周辺には農地の灌溉のため溜堀という施設が点在している。遺跡の北東には伊古瀬（現在埋立）、長沢渕、淺瀬があり、西側の微高地を下った地点にはきんこり瀬があり、寒川清水に流れているという（藤井洋一氏から御教示頂いた）。今回検出したSX04とSD01も同様の施設であり、18世紀以降に井戸として造り変えられたものと推測する。今後の課題として、溜堀の分布調査や周辺の用水等の検討によって明らかになることが多いであろう。

<参考文献>

- 阿河銳二 2000『道味遺跡』寒川町教育委員会
阿河銳二 2003『養神古墳群』さぬき市教育委員会
有馬清平 1931『石田村誌』
大内豊谷 1922『石田村古蹟考』
大川町市編集委員会1978『大川町史』
大川町教育委員会1993『大川町の埋蔵文化財』
梶原藍水 1853頃 『讃岐国名勝図絵』
片桐孝浩 2002『原間遺跡Ⅰ』
亀井芳文 2006『創建時の極楽寺遺跡調査』
『さぬき市の文化財 №3』
國木健司 1993『石田高校校庭内遺跡発掘調査報告書』
香川県教育委員会
黒木安雄 1899『讃岐史要』
寒川町教育委員会1983『中尾古墳発掘調査報告書』
寒川町教育委員会1984『極楽寺遺跡発掘調査報告書』
長尾町教育委員会1989『椋の木古墳 大石北谷古墳調査報告書』
藤井誠一 『幻の寺 石田 極楽寺』
藤井誠一 『寒川郷土誌』
古瀬清秀 1985『第一編 IH石器・縄文・弥生時代』
『古墳時代』『寒川町史』
細川信晃 1991『野崎古墳について』
『ふるさと寒川』
細川信晃 2000『養神古墳第三号古墳について』
『ふるさと寒川 第二十集』
松岡調 明治中期 『新撰讃岐国風土記』
森下英治 2006『石田高校校庭内遺跡』
『香川県埋蔵文化財調査年報』平成17年度
山本一伸・國木健司・片桐節子 1997『森広遺跡』
寒川町教育委員会
山本一伸 1997『石田高校校庭内遺跡』
寒川町教育委員会
山元素子 2000『本村・横内遺跡』
『県道改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』

表 1 遺物観察表 土器

番号	品名	種別	器 壺	直 濶	山口瀬(直径cm)	器高(cm)	底径(cm)	土	施成	調	備 考
7	1	弥生土器	壺	SH01	13.4	—	—	石英・赤色粒	良好	(外) 5YR6/8褐色 (内) 10YR8/6褐色	外山八ヶ岳
7	2	弥生土器	壺	SH01	—	—	—	長石・石英	良好	2.5YR7/9褐色	外山八ヶ岳
7	3	弥生土器	壺	SH01	—	—	—	長石・赤色粒(多い)	良好	7.5Y6/4L2H褐色	外山八ヶ岳
7	4	弥生土器	壺	SH01	16	—	—	長石多い	良好	5YR7/8褐色	—
7	5	弥生土器	壺	SH01	16.3	—	—	長石少	良好	10YR8/4浅褐色	—
7	6	弥生土器	壺	SH01	16	—	—	精微(長石・赤色粒)	良好	(外) 5YR7/6褐色 (内) 10YR6/4H6褐色	丁寧な作り
7	7	弥生土器	壺	SH01	6.4	—	—	精良	良好	10YR7/4H4にぶい黃褐色	下部の割崩
7	8	弥生土器	壺	SH01	10	—	—	石英・長石	良好	(外) 10YR7/4にぶい黃褐色 (内) 5YR6/6褐色	—
7	9	弥生土器	壺	SH01	20.6	—	—	石英・長石	良好	(外) 5YR6/6褐色 (内) 2.5YR8/3淡黄色	口縁部に擦剥文
7	10	弥生土器	二重口縁壺	SH01	25	—	—	長石・石英・赤色粒(多い)	良好	5YR8/4A級褐色	口縁部に格子文
7	11	弥生土器	一重口縁壺	SH01	—	(24)	6.2	石英・長石	良好	(外) 5YR6/6褐色 (内) 5YR6/6褐色	—
7	12	弥生土器	鉢	SH01	21.6	(8)	—	石英・長石	良好	(外) 5YR6/6褐色	—
7	13	弥生土器	鉢	SH01	33.6	—	—	長石・石英(多い)	良好	(外) 10YR7/4にぶい黃褐色	脆弱な脚土
7	14	弥生土器	壺	SH01	35	—	—	石英・長石	堅密	2.5YR7/6褐色	—
7	15	弥生土器	口縁鉢	SH01	—	—	粘質	—	良好	5YR6/6褐色	—
7	16	弥生土器	甌	SH01	20.7	17	2.8	細砂	良好	10YR7/4にぶい黃褐色	—
8	17	弥生土器	甌	SH01	17	—	—	長石(少)・赤色粒	堅敏	(外) 2.5YR6/6褐色 (内) 5YR7/6褐色	外山に黒斑
8	18	弥生土器	甌	SH01	20.8	—	—	石英・長石	堅敏	5YR7/6褐色	—
8	19	弥生土器	甌	SH01	20.7	—	—	—	良好	(外) 2.5YR6/8褐色 (内) 2.5YR6/8褐色	外山下部が焼化
8	20	弥生土器	甌	SH01	24	(23)	—	小砂	良好	10YR7/4にぶい黃褐色	—
8	21	弥生土器	底部	SH01	—	—	—	石英・長石	良好	(外) 2.5YR7/8褐色(黒色化している) (内) ~5YR6/6褐色	20と或合か?
8	22	弥生土器	甌	SH01	16.5	—	—	精良	良好	5YR6/6褐色	下川津山領
8	23	弥生土器	甌	SH01	16.1	—	—	粗砂	良好	7.5YR6/6褐色	下川津山領
8	24	弥生土器	甌	SH01	12	—	—	石英	やや不良	7.5YR6/6褐色	—
8	25	弥生土器	甌	SH01	17.2	—	—	長石・赤色粒	良好	7.5YR6/4L2H褐色	—
8	26	弥生土器	甌	SH01	—	—	—	—	良好	7.5YR6/4L2H褐色	—
8	27	弥生土器	甌	SH01	9.4	15	2.2	石英・長石	良好	2.5YR7/8褐色	元形
8	28	弥生土器	甌	SH01	16.7	—	—	石英・長石(多い)	堅敏	(外) 7.5YR6/4にぶい褐色 (内) 5YR4/1褐色	—
8	29	弥生土器	甌	SH01	18.6	—	—	長石多く含む	良好	7.5YR6/6褐色 (内) 2.5YR7/8褐色	—
8	30	弥生土器	脚付底盤	SH01	—	—	12.9	細砂	良好	10YR8/4浅褐色	—

遺物觀察表 (2)

固有番号	品目	種別	器	種	山土遺構(口径(cm)高さ(cm))	外径(cm)	土	胎	色	調査	備考
8 31	弥生土器	底部	底部	SH01	—	3.2	石英・長石・赤(9粒)(少)	要質	(外) 5YR6/6褐色 (内) 2.5YR7/16/8褐色 にぶい赤褐色	良好	底部にハケあり
8 32	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.9	精良	要質	(外) 10YR4/6褐色 (内) 10YR7/4にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
8 33	弥生土器	底部	底部	SH01	—	—	細砂	良好	(外) 10YR4/1地灰茶 (内) 5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
8 34	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.8	細砂	良好	(外) 10YR6/6褐色 (内) 2.5YR7/16/8褐色 にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
8 35	弥生土器	底部	底部	SH01	—	3	長石・石英多い	良好	(外) 10YR6/6褐色 (内) 2.5YR7/16/8褐色 にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
8 36	弥生土器	底部	底部	SH01	—	6.8	精良	良好	(外) 7.5YR7/14にぶい黄褐色 (内) 2.5Y4/1黄灰色	良好	底部にハケあり
8 37	弥生土器	底部	底部	SH01	—	5	細砂～粗砂	良好	(外) 10YR6/6褐色 (内) 2.5YR7/14にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
8 38	弥生土器	底部	底部	SH01	—	3	長石・石英多い	良好	(外) 10YR6/6褐色 (内) 2.5YR7/16/8褐色 にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
8 39	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.8	細砂少量	良好	5YR6/4にぶい褐色	良好	底部にハケあり
8 40	弥生土器	底部	底部	SH01	—	6.9	細砂～粗砂	良好	5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
8 41	弥生土器	底部	底部	SH01	—	5.4	細砂	良好	(外) 5YR6/6褐色 (内) 2.5YR6/8明赤褐色	良好	底部にハケあり
8 42	弥生土器	底部	底部	SH01	—	6	細砂	良好	(外) 10YR6/6褐色 (内) 2.5YR7/4にぶい褐色	良好	底部にハケあり
9 43	弥生土器	底部	底部	SH01	—	5.8	精良	良好	2.5Y17/5/4にぶい赤褐色	良好	底部にハケあり
9 44	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.2	細砂	良好	2.5Y17/5/4にぶい赤褐色	良好	底部にハケあり
9 45	弥生土器	底部	底部	SH01	—	—	やや精良	良好	10YR6/4にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
9 46	弥生土器	底部	底部	SH01	—	3.7	細砂～中砂	良好	10YR6/3にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
9 47	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.1	精良	良好	(外) 10YR6/3にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
9 48	弥生土器	底部	底部	SH01	—	—	細砂	良好	(外) 10YR6/3にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
9 49	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.8	細砂	良好	7.5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
9 50	弥生土器	底部	底部	SH01	—	3.6	細砂少量	良好	7.5YR6/4にぶい褐色	良好	底部にハケあり
9 51	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.6	細砂少量	良好	(外) 2.5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
9 52	弥生土器	底部	底部	SH01	—	3.3	細砂	良好	(外) 10YR7/4にぶい黄褐色 (内) 7.5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
9 53	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.4	細砂	良好	10YR6/4にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
9 54	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4.4	細砂	良好	7.5YR6/4にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
9 55	弥生土器	底部	底部	SH01	—	3.4	細砂	良好	5YR5/3/2地灰茶 (内) 2.5Y4/1灰褐色	良好	底部にハケあり
9 56	弥生土器	底部	底部	SH01	—	4	細砂	良好	(外) 5YR5/3/2地灰茶 (内) 2.5Y4/1灰褐色	良好	底部にハケあり
9 57	弥生土器	底部	底部	SH01	—	5.4	極細砂	良好	7.5YR5/4にぶい褐色	良好	底部にハケあり
9 58	弥生土器	底部	底部	SH01	—	6	精良	良好	5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
9 59	弥生土器	底部	底部	SH01	—	—	細砂	良好	10YR6/4にぶい黄褐色	良好	底部にハケあり
9 60	弥生土器	底部	底部	SH01	—	5.5	細砂	良好	(外) 7.5YR7/4にぶい褐色 (内) 2.5Y4/1灰褐色	良好	底部にハケあり
9 61	弥生土器	底部	底部	SH01	—	7.8	やや粗粒	良好	(外) 7.5YR7/4にぶい褐色 (内) 2.5Y4/1灰褐色	良好	底部にハケあり
9 62	弥生土器	底部	底部	SH01	—	9	細砂多々含む	良好	(外) 7.5YR7/4にぶい褐色 (内) 2.5Y4/1灰褐色	良好	底部にハケあり
9 63	弥生土器	底部	底部	SH01	—	—	細砂少量	良好	5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
9 64	弥生土器	底部	底部	SH01	23.1	17	長石・石英・少量紅玉・赤色	良好	7.5YR6/6褐色	良好	底部にハケあり
11 69	弥生土器	底部	底部	SX03	27.3	—	細砂	良好	5YR5/6明赤褐色	良好	底部にハケあり
11 70	弥生土器	底部	底部	SX03	—	—	—	良好	5YR5/6明赤褐色	良好	底部にハケあり

表3 遺物鑑察表 土器 (3)

図版	番号	種別	器種	出土遺構	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	施成	色	備考
13	99	土師質土器	甕状部	SE01石組上	—	—	23.2	細砂・素面	良好	転底断面に削取り 外表面灰又、内面褐色
13	100	土師質土器	甕	SE01石組	—	—	—	細砂・素面	良好	7.5YR4/3褐色
13	101	土師質土器	口縁部	SE01上	12.1	—	—	精良、素面・角凹石	良好	10YR5/3にぶい褐色
13	102	土師質土器	口縁部	SE01上	19.3	—	—	精良、素面・角凹石	良好	10YR6/3にぶい褐色
13	103	土師質土器	底盤?	SE01石組上	—	—	—	細砂少量	良好	5YR6/6褐色
13	104	土師質土器	脚部?	SE01石組上	—	—	—	精良	良好	5YR6/6褐色
14	105	漆土土器	底衣	SE01上	26.5	—	—	細砂	良好	5YR5/6明赤褐色
14	106	須恵器	口縁部	SE01上	23.2	—	—	精良	良好	N5.0褐色
14	107	須恵器	垂頭部	SE01石組上	—	—	—	精良	良好	5YR5/5灰色 (内) 5YR5/2褐色オーバーペイント色
14	108	須恵器	底盤	SE01石組上	—	—	—	精良	良好	(内) N4.0褐色 (内) 2.5YR6/6灰褐色
14	109	須恵器	脚部	SE01石組	—	—	—	精良	良好	N6.0灰色
14	110	瓦質土器	焰烙	SE01石組上	43	—	—	精良	良好	2.5YR3/2灰褐色 (内) 2.5YR7/2灰褐色
14	111	瓦質土器	焰烙	SE01石組上	—	—	—	精良	良好	2.5YR3/2灰褐色 (内) N4.0褐色
14	112	瓦質土器	焰烙	SE01石組上	—	—	—	精良	良好	N5.0褐色
14	113	瓦質土器	焰烙	SE01上	—	—	—	精良	良好	2.5YR6/2灰褐色
14	114	瓦質土器	焰烙	SE01上	—	—	—	精良	良好	5Y5/1褐色
14	115	瓦質土器	羽釜	SE01石組	—	—	—	精良	良好	5Y5/1灰褐色 (内) 2.5YR7/2灰褐色
14	120	「墻付」製品	—	SE01上	4.2(2.7)	1.0(厚)	23.5(重)	—	良好	2.5YR4/2灰褐色 (内) 2.5YR4/1褐色
16	133	土師質土器	足釜	SE01石組	—	—	—	精良	良好	10YR7/3E灰褐色
16	134	土師質土器	足釜	SE01石組上	—	—	—	精良少量	良好	10YR7/3E灰褐色
17	139	須恵器	壺腹部	SE01裏込み	—	—	—	精良	良好	N5.0褐色
17	140	須恵器	高台付杯	SE01裏込み	—	—	—	精良	良好	5Y5/0褐色
17	141	須恵器	甕部	SE01裏込み	—	—	—	やや粗良	良好	5YR7/6褐色 (内) 5YR6/6褐色
17	143	不明	不明	SE01裏込み	—	—	—	—	良好	10YR8/4灰褐色 (内) 5YR7/6褐色
17	145	土師質土器	口縁部	SE01裏込み	—	—	—	細砂・繊維	良好	7.5YR3/6褐色 (内) 2.5YR7/8褐色
17	146	土師質土器	口縁部	ST01周囲	—	—	—	—	良好	10YR7/4にぶい褐色
20	149	土師質土器	甕	SX05	28.7	—	—	精良	良好	5YR7/4にぶい褐色
20	150	土師質土器	底鉢	SX05	—	—	—	19.6	良好	7.5YR6/4にぶい褐色
20	152	瓦質土器	焰烙	SX05	34	—	—	精良	良好	2.5Y4/1褐色
21	163	弦生土器	広口盤	SK02	18.6	—	—	細砂	良好	7.5YR7/6褐色
22	156	瓦質土器	焰烙	SK02	36	—	—	精良	良好	N2.0褐色
22	157	土師質土器	土瓶	SP09	—	—	—	精良	良好	5YR4/2灰褐色
22	158	瓦質土器	焰烙	SP10	—	—	—	精良	良好	2.5Y6/2灰褐色

SE01上=石組内の褐色砂質土下位と灰色土から出土
SE01石組=石組内の褐色砂質土

表 4 観察表 陶磁器・陶器

部数	番号	種別	器種	出土施設位置	口径 (cm)	溝高 (cm)	底径 (cm)	底色	調査
13	72	織物・漆器	山東焼	SE01石組上	10.5	-	-	N 8/灰白	7.5Y7/3浅黄褐色
13	73	肥前系磁器	端刃碗 鉢	SE01石組上・石組1	-	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	74	肥前系磁器	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	75	肥前系磁器	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	76	肥前系磁器	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	77	肥前系磁器	袋物	SE01石組上	-	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	78	肥前系磁器	札板	SE01石組上	1.4	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	79	肥前系磁器	小皿	SE01石組上	8.2	1.9	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	80	肥前系磁器	小皿	SE01石組上	-	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	81	肥前系磁器	鉢	SE01石組上・石組1	16.8	-	-	N 8/灰白	N 8/灰白
13	82	京都・山東系磁器	鉢	SE01石組上	22	-	-	5Y7/1灰白色	5Y7/3灰白色 (鉢軸)
13	83	肥前系磁器	鉢	SE01石組上	-	-	-	2.5YR7/6-2.5YR6/6黄色	7.5YR3/3暗黄色 (鉢軸)
13	84	不明風 (压板状)	せんじ碗	SE01上	14.2	-	-	10YR7/1灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
13	85	大谷燒	底部	SE01上	-	-	-	10R5/4赤褐色	10R5/2の火痕2ヶ所あり
13	96	大谷燒	他利	SE01上	-	-	-	10E5/4深褐色	10E5/2の火痕2ヶ所あり
13	88	被物	底	SE01上	-	-	-	5Y7/1灰白色	5Y7/3灰白色 (鉢軸)
13	89	施釉陶器	土瓶	SE01石組上	-	-	-	5YR7/1灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
13	90	施釉陶器	灯明皿	SE01上	6.2	-	-	2.7	10Y7/1灰白色
13	91	京都・山東系陶器	灯明皿	SE01上	-	-	-	5YR7/1灰白色	5YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
13	92	京都・山東系陶器	人形	SE01石組上	-	-	-	5YR7/1灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
13	93	龍口・美濃系磁器	鉢	SE01石組上	-	-	-	5YR7/1灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
13	94	施釉陶器	底?	SE01上	-	-	-	5YR7/1灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
13	95	施釉陶器	底?	SE01上	-	-	-	5YR7/1灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
13	96	施釉陶器	底部	SE01石組上	-	-	-	5YR7/1灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
14	97	大谷燒	端刃碗	SE01石組上・石組1	29.4	-	-	10R4/2灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
14	116	明石系	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	2.5YR14/2灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
14	117	明石系	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	2.5YR14/2灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
14	118	明石系	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	2.5YR14/2灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
14	119	明石系	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	2.5YR14/2灰白色	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
14	121	明石系	端刃碗	SE01石組上	31.2	11.8	14.5	10R4/2灰白色 (底) 10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
15	122	明石系	端刃碗	SE01石組上	-	-	-	16	10YR7/4にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
17	144	輪削器	端刃碗	SE01裏込み	29.3	-	-	(外) 7.5YR6/4にぶれた褐色	5YR7/1灰褐色
20	147	施釉陶器	鉢	SX05	14.2	-	-	(外) 7.5YR6/4にぶれた褐色	5YR7/1灰褐色
20	148	丹波燒	巻	SX05	22	-	-	10YR6/1灰白色	5YR7/1灰褐色
20	151	導・明白系	端刃碗	SX05	-	-	-	2.5YR7/1灰白色	7.5R3/3褐色 (底) 10YR6/3にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
21	154	施釉陶器	蓋	SK02	9.1	1.4	-	2.5YR5/6灰褐色	2.5YR4/3にぶれた褐色の目隠3ヶ所あり
21	155	施釉陶器	蓋	SK02	9.3	1.5	2.5	10YR4/4灰褐色	10YR4/4灰褐色

SE01上:=石組から土台、SE01石組上:=石組から出土、SE01石組=石組内の中身

表 5 観察表 瓦

図版	番号	種別	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	施設	色	調	内面調査	外山調査	備考
16	123	平瓦	S201石組上	(5.5)	(6.1)	1.5	良好	繊維	5Y6/1灰赤	布目	タタキ	ナデ酒
16	124	平瓦	S201石組上	(5.5)	(7.2)	2	良好	繊良	10Y6/4にぶい黄褐色	布目	格子タタキ	模擬表記
16	125	丸瓦	S201上	(9.6)	(8.3)	1.9	良好	繊良	10Y4/暗緑灰赤	布目	ナデ	繊山施面
16	126	丸瓦	S201上	(10.5)	(5.0)	1.7	良好	繊維	N3/暗灰赤	タタキ	ナデ	
16	127	丸瓦	S201石組	(6.4)	(4.0)	1.8	良好	繊良	5Y6/1灰赤	コピキ目	△	△
16	128	丸瓦	S201上	(9.4)	(7.5)	1.8	良好	繊良	10Y6/5/1青灰赤	對子張	ナデ	
16	129	丸瓦	S201	(12.0)	(7.0)	1.9	良好	繊良	(N) 7.5/5/1灰赤	内タタキ	ナデ	長縫2.5cm
16	130	丸瓦	S201石組	(9.2)	(5.0)	1.8	良好	繊良	5Y6/1灰赤	内タタキ・對子張	ナデ	
16	131	軒瓦	S201上	(7.0)	(6.8)	2	良好	繊良	10Y7/4/1纏灰赤	内タタキ・對子張	ナデ	内面に焼付跡
16	132	斜平瓦	S201上	(10.0)	(5.5)	1.5	良好	繊良	(N) 5P6/1青灰赤	ナデ		
16	133	斜平瓦	S201燒込跡	7.3	5.3	1.2	良好	繊糸	(N) 10YR6/2灰青褐色	ナデ		
									10Y7/4/1灰赤	布目	タタキ	

表 6 遺物観察表 石製品

図版	番号	種別	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	粘土	備考
9	65	明石	右村	安山岩	S101	6.2	5.3	4.2
9	68	滑石	サヌカイト	サヌカイト	S101	2	1	0.3
11	71	円盤状石製品	SX01	SE01石組	SX01	4.6	4.4	0.6
16	135	石器	安山岩	SE01石組	15.7	22.8	19.5	五輪塔火輪?
16	136	砥石	砂岩	SE01とSX01の間	15.3	10	4.2	1227.6
16	137	砥石	流紋岩	SE01石組	7	6.7	2.5	202.8
16	138	砥石	安山岩	SE01石組	4.3	5.9	0.25	7.1

表 7 遺物観察表 鉄製品

図版	番号	種別	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
9	66	刀子	S101	3.1	1.1	0.3	2.2	
9	67	鉄鏡?	S101	2.2	0.6	0.45	1.0	



1 調査区周辺航空写真（昭和39年）



1 調査区全景（西から）



2 調査区全景（東から）



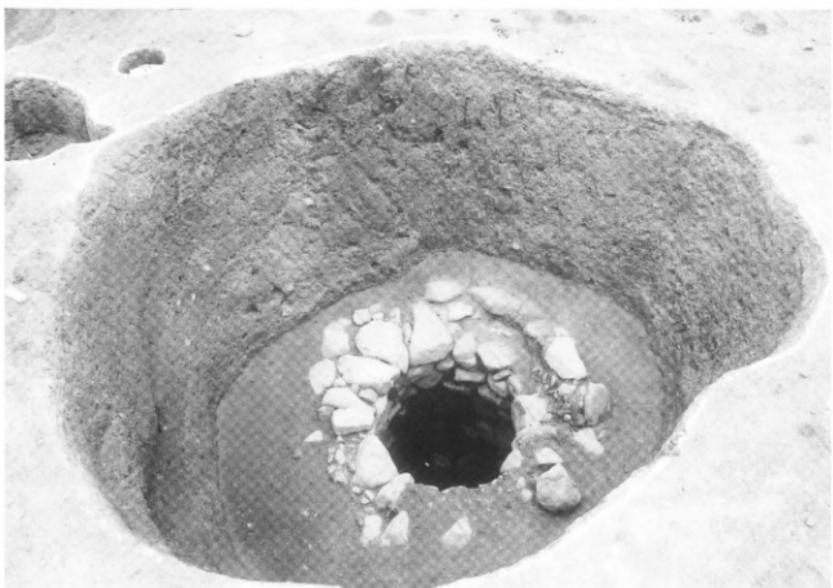
1 SH01（東から）



2 SH01遺物出土状況（北から）



1 SH02 (南東から)



2 SE01 (南から)



1 SE01石積状況（東から）



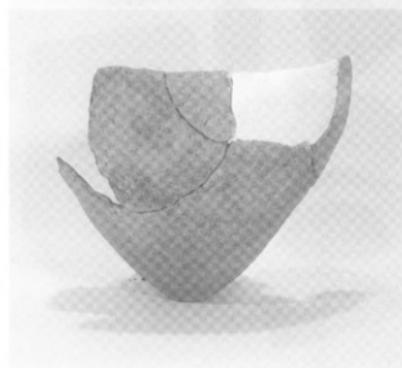
2 SE01底場の様子（東から）



1 SE01断ち割り（東から）

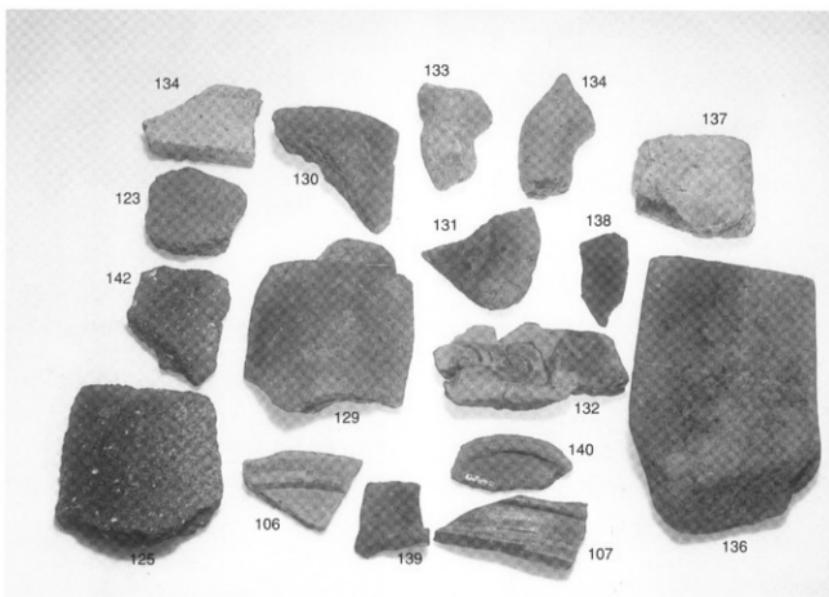
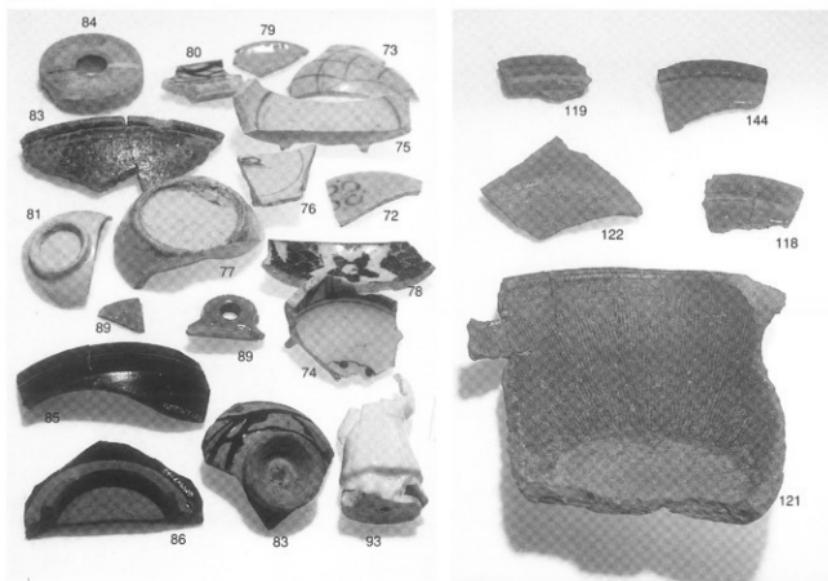


2 SX04, SD01（西から）



1 SH01出土遗物

圖版 8



1 SE01出土遺物

報告書抄録

ふりがな	もりひろいせき
書名	森広遺跡
副書名	ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	さぬき市埋蔵文化財調査報告書 第5集
編著者名	松田朝由
編集機関	大川広域行政組合埋蔵文化財係
発行機関	さぬき市教育委員会
所在地	〒769-2492 香川県さぬき市津田町津田138-15 TEL 0879 42 3107
発行年月日	西暦 2007年7月 口

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査原因
		市町村	°	°		
森広遺跡	香川県さぬき市寒川町石田1396-1他	3720643730	34°15'42"	134°12'40"	2007/2/19 ~3/9	ガソリンスタンド建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
森広遺跡	集落	弥生・後期 古墳・後期 近世	竪穴住居 土坑 井戸 溝 不明遺構	弥生土器、鉄製品、石製品、須恵器、瓦、土師質土器、陶磁器、陶器	弥生時代後期中～後葉の集落跡と、近世末～近代の貯水施設、井戸を確認した。

ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

森 広 遺 跡

2007年9月 発行

編集 大川広域行政組合

発行 さぬき市教育委員会

〒769-2492 香川県さぬき市津田町津田138-15

電話 (0879) 42-3107

印刷 ナカハタ印刷株式会社